君と二人で～Render with you.

紅魔館雑務総括

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
君と二人で～Ｒｅｎｄｅｒ　ｗｉｔｈ　ｙｏｕ.

【Ｎコード】
Ｎ０８５１Ｆ

【作者名】
紅魔館雑務総括

【あらすじ】
音楽、恋愛、微弱に戦闘。・・・・・音楽に目覚めた少年が、冥界や彼岸や地獄でいろいろイベントをするお話。メインヒロイン：リリカ・プリズムリバー。サブヒロイン：小野塚小町。

arene:un　彼岸葬送交響曲～Sinfonia　da　Requiem

この前、間違えて削除してしまいまして・・・あはは、だめですね・・・

オリキャラがたくさん登場しちゃいますので、その辺は気にせずにも大丈夫です。

人を観念的に見ると『肉体』『霊体』『霊魂』の三つに分けられるらしい。
『肉体』には記憶が、『霊魂』には自我が、『霊体』にはその両方が少しずつ、宿っている。
・・・まあ、どうでもいいが。

三途の川の前。
気がつけば、目の前には鎌を持つ紅髪の女性が。
「・・・珍しい。人間の姿を保ってる。・・・魂の気配が薄いねぇ」
「・・・あんた、誰だ・・・？」
「しかも喋るときた。これはかなり渡し賃が期待できそうだ」
「・・・はぁ・・・？」
「ここは三途の川。で、あたいは川渡しの番人で、死神。あんたから渡し賃を貰ってあんたを閻魔様の元へ渡す」
「何だそれ・・・俺、金なんて無いんだけど」
「握ってる手を開いてみな」
いわれた通りにしてみる。
「・・・無いけど」
「あれ、じゃあ懐はどうだい」
ポケットに手を突っ込み、何か無いか探す。
ベルトに何か掛かっている。
取り出すと、そこには純白の指揮棒。うっすらとだが、光を放っている。
「・・・なんで・・・指揮棒なんだ・・・？」
「ん？指揮棒・・・？金も無し、それだけが掛かってたのかい」
「ああ・・・で、閻魔とか言うやつは・・・確か、魂の断罪者だよ

な」
「お？よく覚えてるね。閻魔は、人や妖の罪を見て、その者の行くべき場所を指し示す者・・・ってのが正しい解釈かね」
「へえ・・・でも、俺まだ、死んでないけど？」
「何言ってんだい。『ここにいる』即ち『死んでる』ってことなんだよ」
「ここをまっすぐ帰れば、戻れるんだろ？俺は、帰るぜ」
「・・・。なに？　消えたいの？　ここからまっすぐ帰ったところで、あんたが消滅するだけだよ」
「ほう・・・。じゃあ、試してみるか」
「ちょっ？！　あんた、怖くないのかい？！」
「何でだよ。転生したところで、『今の俺』は消滅するんだろ。だったら、同じだよ」
「ふぅん・・・面白いやつも、いたもんね。いいよ、あたいがついてったげるよ」
「証人・・・か。いいぜ、ついてこいよ」

ついて来た女は、小野塚　小町と言うらしい。サボりの常習で、しょっ
ちゅう三途の川に霊魂があふれかえるそうだ。
しばらくして、深紅に染まった彼岸花が沢山咲いている場所にきた。
「何だこれ」
「『再思の道』・・・もうちょっとで、顕界だよ。覚悟はいい？」
「何言ってんだ。もう出来てるに決まってんだろ」
次第に彼岸花が少なくなり、橋が見えてきた。
「あの橋、超えてから戻ってきてみな。あたいが見届けてやるから」
「あんまり光栄じゃないがな・・・」
橋を渡り、森を眺める。
「嫌な湿気だな・・・気持ちわりぃ。・・・消えて無い、よな」
そして、もう一度橋を戻った。

「どうだ？　消えないだろ」
「・・・信じられないね。まさか、本当に戻ってくるとは」
「だろ？　俺は、死んでない」

「小町！　何をしているのですか！」

「げ。映姫様だ」
「ん・・・？　あの格好、なんとなく閻魔っぽくないか？」
「なに言ってんだい。あの方が、閻魔様だよ」
閻魔だと言われても実感のないほど、現れた少女は幼く見えた。
「小町！　全く、貴女という死神は・・・って、この霊魂・・・」
「面白いでしょ、映姫様。人の形を保ち、かつ言葉を発して、記憶も多少残ってる上に顕界に行って帰ってくることもできる。しかも無銭で指揮棒だけ持ってるなんて、かなりの変り種ですよね」
「・・・無銭？　では、彼は、霊魂ではないかもしれませんね」
「な？　俺は、死んでないだろ？」
「そういう訳ではありません。・・・小町。あなたは、三途の渡し賃は、元は何か知っていますね？」
「あ、えーっと・・・『そのものの人生の価値』と『霊体の大きさ』でしたよね」
「ええ。で、この・・・名前は？」
「覚えてない。というか俺に名前があったかすらわからん」
「・・・ほう。じゃあ、昔聞いた事のある名で、『メロディ・プリズムリバー』なんてのがあったんだが、そんなんでどうだい」
「ちょっと位はもじりましょう。和訳と改変を加えて『虹川（にじかわ）　奏（かなで）』と言うのは？」
「悪くはないが、話を進めろ」
「じゃあ、奏としておきましょう。で、この奏は、霊体そのものである可能性があります」
「え？霊体は、自発的に動くことはおろか、思考すらできないって・

・・・」
「小町、例外というのは、常にあらゆる事柄に付きまとうものですよ」
「はぁ？霊体って何だよ？」
「・・・そんなことも知らないのですか」
「あたしが説明しようか？めんどくさいけど」
「ああ、頼む」
「人間は『顕界』とか『冥界』とかのものの見方をすると、外側から『肉体』、『霊体』、ごくまれに『魔法体』、そして『霊魂』と呼ばれるものがあるのさ」
「『魔法体』ってのは？」
「そうさねぇ・・・『霊体』の代わりになにやらわけわからん力をぶち込んだものらしいけど」
「説明できてねえじゃん」
「小町が分らないのも無理はありませんね。私は、そこに関して詳しく教えていないので。・・・『魔法体』は、肉体と魂をつなぐ『霊体』の代わりをする役目のもの。ただそこに、我々が『統治者』、『支配者』、『絶対者』などの名で呼ぶものの命の片鱗を叩きこんだものです。・・・そこで、あるひとつの仮説が思いつくわけです」
「・・・『魔法体』が元の俺の『肉体』と『魂』の媒介になり、『霊体』である俺が、完全な状態でここに吐き出された、と言ったところか」
「ほぅ・・・あんた、頭いいね。あたいにゃ、こんな難しい話、右から左だよ」
「奏の言うとおり、その線が怪しいですね。もっとも、こんなこと、二千年ほど昔に一度、記録された程度。早々あるわけでもないですし」
「よくはわからんが・・・死んだ実感がない。とりあえずどうすればいい？」
「渡し賃もなし、魂もないから裁きようがない・・・これは、ちょ

っとした事件ですね」
「事件て・・・大げさすぎやしませんか、映姫様」
「・・・小町。とりあえず奏を置いておける場所を探しなさい。私は、白玉楼と連絡をとって来ます」
「その・・・白玉楼って、遠いのか？」
「まあ、空を飛んだりできないと行けませんしね。霊体なら、それくらいできると思いますが」
「・・・ひょっとして、あたい訓練する、とか？」
「ほかに誰がいますか」
「・・・わかりましたよ。空を飛ばせればいいんですね？やりますよやりゃあいいんでしょ」「物分りがいいですね。仕事もこれくらいスムーズにこなしてくれればいいのですが・・・」
映姫と呼ばれていた閻魔は、空を飛び、去っていった。
奏と名づけられた俺は、小町に腕を鷲掴みされ、川に戻った。
「本当はやっちゃいけないんだけど・・・乗んな」
「いいのか？渡し賃がいるんだろ？」
「今は緊急事態、かつ寝床への唯一の道だよ。仕方ないからね」
「あ、ああ・・・」
小町の用意した舟に乗り込み、川を渡ってもらう。
案外、揺れないもんだな・・・流れ、割と激しいのに。
「あたしの腕、わかったかい？こんなとこでなきゃ、もっとぶっ飛ばせたのにねぇ」
「・・・飛ばされたら、多分俺、船酔いする」
「霊体のくせに船酔いはないだろ。本来は抜け殻なんだし」
「確かに。一理あるな」
「あれ？おかしいな・・・」
「どうした？櫂でも支(つか)えたか」
「いや。あたいの距離を操作する力が、うまく働かないんだよ」
「お？そんな能力がお前にあったのか」
「まあね。でもそれが利かないんじゃ、かなり時間がかかるよ、こ

の三途の川は」
「どのくらいだ？」
「軽く見積もって・・・十月十日、と言ったところかね」
「・・・わたり終えたと思ったらどこぞでこどもが生まれているころだな」
「それに、戻れもしないんだよ・・・ここまで来たら」
「だめだな。俺らは、ここで終わりだな」
「うるさいね。あんたみたいな冷めたのと最期を迎えるのは嫌だよ」
「俺も、お前みたいな五月蝿いのと消滅するのは御免だ」
「なっ？！　言ったね、この鎌でぶった切ってやる！」
「おお？　できるもんならやってみろよ！」
「はぁっ！」
小町の鎌を、俺は指揮棒で受けた。
さすがに折れるかと思ったが、そんな気配は微塵もない。
「ふふふ、あんたの武器かい？その指揮棒！」
「かもしれねぇな！」
試しに少し振ってみた。三拍子のリズムで。
すると、聞こえた。何かはわからないが、声が。
『それで、我々を導け、媒介の少年よ』
気がつけば、俺は叫んでいた。
「風よ、水よ、此処にある全てよ・・・舞踏の時間だっ！」
水が俺を空という指揮台へ導き、風がワルツのリズムを刻み、気がつけば沈んでしまった魂たちも舞い踊る、不思議な空間へとかわっていく。
「ちょっ・・・あんた、これは・・・」
「知らねぇな。でもまあ、あんたの負けは確実だな・・・行くぞ！」
水を小町の乗っている舟の周りだけ退けさせ、その後一気に、押しつぶす。
「わーっ！あたいの負けだ、だから水だけは勘弁してくれぇぇぇっ！」

「・・・わーったよ。やめてやるよ」
水を小町の直前で止め、下からゆっくりと滑り込ませていく。
「あ・・・ありがと・・・」
「別に、礼を言われるほどの事は・・・」
「そ、そうかい。・・・でも、すまないねぇ。こんなとこで立ち往生しちまって」
「別に。ちょっとコツを掴んできたぞ、これ」
「ん？あんたの、その指揮かい？」
「ああ。これ、どうやら、空間ごと操れるみたいだ」
「そりゃすごいね」
「こうして、こんな感じで・・・」
俺は少し重めに、指揮棒を振ってみた。
すると、『ぎゅん』と川が音を立てて目の前に木造りの小屋が現れた。
「距離とか空間も捻じ曲げて縮められるみたいだ」
「ほう・・・すごいね、これ」
「俺も正直、驚いてる・・・あ、この家にも。誰の家だよ、こんな小屋」
「あたいの家なんだけどね。しばらく、あんたも此処で寝る事になるよ」
「はぁ？あんたの、家で？なに言ってんだ」
「あんたねぇ、空もまともに飛べやしないのに、白玉楼なんていけるわけないでしょうが。あたいが、訓練しなきゃいけないわけよ」
「・・・だからって、此処で寝泊りって・・・」
「安心しな。あたいは、あんたみたいなチビ興味ないから」
「・・・ここの水、もう俺の支配下なんだけど？」
「ごめんごめん。ちゃんと距離を操って仕切りを入れるさ」
「・・・頼むぞ」
あー、気が滅入る。こんな煩いのと四六時中一緒とは・・・

「気ぃ抜くな！　集中しろっ！」
「言われなくてもわかってる！　静かにしやがれっ！」
小町の家に連れてこられて早数日。毎日毎日霊術・乾坤操術の練習。
ついでに、此処『幻想郷』の基本的な知識を説いてもらった。
空を飛ぶのは二時間で習得。意外と初歩的らしい。
霊術は長時間顕界に居て消滅の危機が迫ってきたときのための霊体修復の術。
まずこれがとてつもなく高度な術だと、小町は言う。
「命を操るんだからね、そうたやすくはないんだよ。周りに満ちる『気』を、『霊体』から擬似的に作り出した『霊魂』で収束して、『霊体』の回復を図るのが、この術の特徴さね」
乾坤操術は、陰陽術の前傾とも言われる非常に荒削りな術式で、うまくいけば俺の『指揮』できる物の幅をかなり広げられるそうだ。
乾と坤の差が、非常に大きい故に、制御も困難なようだが。
「これは・・・あたいも教えられる範囲は狭いよ。なんてったって、土地神の類が自分の土地を潤すために使ってる術だからね。死神が下手に使うと、それこそ三途渡しされるよ」

「ほらほら、『乾の気』の収束が遅れてきてるよ！」
「仕方・・・ないだろ！『乾の気』は、土地との結びつきが強いって、あんたも言ってたろ！」
「だから、『坤の気』の収束を抑えて、『乾の気』の引き剥がしを優先するんだよ！」
『気』の操作は、ほとんど感覚作業。それなりの才能を持ち合わせていないと、術の習得は不可能だという。
「これでいいのかよ・・・！」
「そうそう。あんた、飲み込みがいいよ。じゃあ、指揮棒持って」
「指揮棒に『乾坤の気』を収束して・・・って、今日はレクイエムが聞きたいのか・・・」
「また何かと話してるね、あんた。誰と会話してんだい」

「わからん。ただ、聞こえる声に応じないと、物を動かしたりはできないみたいだ」
「ほう・・・」
寂しげに、切なげに、そして儚げに指揮棒を振るう。
それに併せて、三途の川霧が俺の周りに収束していく。
「蒸せてきた・・・もうちょい前・・・」
目の前に、冷たい白の、霧の塊が出来上がった。
「収束時間の加速度に、上昇が見られるね。上達の証拠かね」
「当然。俺の才能は、並の人間じゃ超えらんねぇよ」
小町に、微笑んで見せた。どうだすごいだろ、と言わんばかりに。
「確かに。あたいにもこんな才能は備わってなかったしね・・・そろそろ今日の練習は切り上げにするか」

「・・・小町」
「なんだい？改まって」
「ありがとな」
「な、なにが？」
「いろいろ。出会い頭から、あんたには迷惑かけっぱなしだったしな」
「そんな、迷惑だなんて・・・あたいの方こそ、サボれる上口実の上に暇つぶしの材料が見つかって、礼を言いたいくらいだよ」
「そう、か？なら、お互いにチャラ、って事でどうだ」
「そのつもりだよ。・・・映姫様が、許してくださるんなら、いつまでだって付き合う覚悟だよ？」
「いつまでも・・・ってのはちょっときついぞ。あんただって、多少は疲れるんだろ」
「あたいは死神さ。疲れなんて、一日中サボらず渡し続けたときくらいだよ」
「・・・あんたも、サボらず働くことがあるんだな」
「うるさいね。あたいだってたまにはバリバリ働くのさ。そうでな

きゃ、クビになってるよ」
「確かにまあ、そうだよな・・・」

「奏！　小町！」

雑談を切ったのは、映姫と呼ばれていた閻魔。
「映姫様！」
「・・・フルネームは？」
「私ですか？四季映姫・ヤマザナドゥと言います」
「長っ」
「四季映姫が姓名で、ヤマザナドゥは役職。『ヤマ』が閻魔、『ザナドゥ』が桃源郷。つまり、『幻想郷の閻魔の四季映姫』という意味です」
「なるほど。そうでしたか映姫様」
「小町・・・知らなかったのかよ・・・」
「ところで、ちゃんと空を飛べるようには、なりましたか？」
「ああ、なったぜ」
「あたいが教えたからね。飛べないほうがおかしいよ」
「あまり関係ない気もしますが。小町、他には何を？」
「そうですね・・・消滅しそうになったときの為に、霊術を少し。あと、初歩的な乾坤操術を」
「そうですか。・・・小町、貴女にしては真面目にやりましたね」
「え、あ、えと・・・映姫様に褒められるなんて、ちょっと驚きました・・・」
「私は鬼ではありません。閻魔です。功績をあげれば、それ相応に賞賛します」
「そうですか・・・これから、もうちょっと励ませて戴きます！」
「ええ、そうしてください。・・・ところで、奏」
「なんだ？四季映姫」
「そう呼ばれるのは慣れていませんが・・・仕方ないですか。小町

と一緒に、ちょっとついて来なさい」
「はあ、あたいもですか」
「当然です」
そうして、俺と小町は映姫について空へと飛び立った。

arene:un　彼岸葬送交響曲～Sinfonia　da　Requiem

だめだ・・・書くことが思い浮かばない・・・
小町は可愛いですね・・・じゃない、メインヒロインはまだですよ・
・・でもない・・・。
ああもういいや。

まず連れて来られたのは、『魔法の森』とかいう、数日前に俺が魂でない事を証明した橋のある森。
「此処に、よく私の知人が来るのです」
「知人？」
「ええ。名を『博麗（はくれい）　煉樹（れんじゅ）』といって、『幻想郷』を管理する者の一人なのです」
「管理・・・どういうことだ？」
「幻想郷の結界のメカニズムは小町からおおよそは教わりましたよね」
「ああ。『博麗大結界』と『実体と幻の境界』の二つが折り重なってできているんだろう？」
「その『博麗大結界』の制御を司るのが煉樹です」
「あの、映姫様」
「なんですか？」
「その、煉樹ってのは・・・男ですか？女ですか？」
「・・・女ですよ。博麗の人間は女の家系ですから」
「へえ・・・」
「ただ今は、人妖闘争の真っ最中。力を失いつつある妖の側についていますので、来るかどうかは・・・」
「約束とかしてんのか？」
「ええ、まあ、此処に出来れば来て欲しいとは言いましたが」
「じゃあ、来るだろ」
「その心は？」
「直感だ。『霊奏の指揮者』の。」
「なんだいそれ？」
「二つ名。あったほうが、格好が良いかな、なんて」

「確かにあったほうがかっこいいね」
「あ、あれは・・・煉樹？」

「おーい、四季ー」
「煉樹。来てくれましたか」
現れた『博麗　煉樹』は、巫女のような格好をしている。しかもずいぶんと奇妙な。
まず、腋がない。肩が見えていて、つながっていない振袖。
袴ではなく、スカート。襟にタイまである。脇腹がやや裂けていて、袖が通りやすいようになっている。
あ・・・こいつサラシか。まあ、どうでも良いか。
「あ、この子が四季の言ってた『霊体の子』？」
「四季映姫。煉樹ってのは、この貧しい体付きの巫女の事か」
指を指して言ってみた。
「むー。人が気にしている事を平然と・・・っ」
「煉樹。あまり気にしないほうが身のためです」
四季映姫がそういうと、巫女の後ろから白地のコートを血染めしたみたいな服装の、若そうな男が現れた。二十台前半、この巫女と釣り合いそうな感じがする。童顔？
「・・・・・急げよ、煉樹。・・・・・貴公が、霊体の少年か。思ったほど幼くはないな」
そう言い、俺を睨んできた。
「・・・・・ふん、そうかい」
「しかし、やはり貴公は少し若すぎるな。『定着』を見る限り、三十日前後か」
「関係ねぇだろ」
「て言うか、ここに連れてきたってことは・・・・・決闘（バトルロワイヤル）ってところでしょ？！」
煉樹が鞘に札が異常なほど貼られた帯剣を抜く。
「ちょ、待って煉樹・・・」

「問答無用！」
目の前にいた四季映姫は一撃でばったりと倒れ、後ろにいた男はいつの間にか消えていて、二撃目で小町が鎌で防ぎきれず気にぶつかって気絶。三撃目で俺も飛ばされるところだった。
「っく！」
指揮棒で受ける。威力を感じない。指揮棒の力だろうか。
「ふふ、ちょっとはやるみたいね！」
数メートル退いた煉樹が札を取り出し、投げた。
陰陽術の類か、僅かに乾の気を感じる。
（乾の気が札に結びついている・・・この気、こいつ自身のものと見た！）
「『地精の行進（ノーム・マーチ）』っ！大地よ、俺について来やがれっ！」
俺は指揮棒を高らかに、リズミカルにかざし、バックステップを繰り返す。
それに続いて、地面にひびが入ったり土がめくれたりと俺の通ったところが変貌を遂げていく。
そこから湧く坤の気を札にぶつけ、余った分は指揮棒に乾の気と併せて充填。
「変わった能力・・・すごいすごい。でも、まだまだ未熟よ！」
「っるせぇ！」
煉樹は剣を器用に振り、攻撃を仕掛けてくる。
指揮棒で受けるが、さすがに速い。受けきれないものは、埋まっている植物の生命を周りの地面の生命力を使い、急速に成長させて受けさせる。
そのとき、煉樹の剣が木にかかって、とれなくなった。
少し退き、冷静に思考をめぐらせる。ふと、この森全体を覆うじめじめした湿気に気づいた。
「この湿気・・・使える！」
乾坤奏術『気象変化』発動。奏術は、指揮棒を使うから勝手に俺が作ったんだけど。

湿気の水を集めて、乾の気を一気に収束、温度を上昇させ、擬似的に雲を作り出す。
雲には雷が集まり、それを煉樹にぶつけるつもりだった。
「勝った！」
雷全体を自分の身に纏っていた乾坤の気で覆い、制御の体制にはいる。
しかし思ったほど雷の制御が簡単ではなく、耐え切れなくなった乾坤の気の制御が砕け、雷が暴発した。
辺りの木には当たらなかったが、煉樹の剣と俺に思い切りの量が振り注いだ。
霊体の俺には特に被害もなかったが、少々動きに鈍りが生じた。
その隙をつかれ、雷を纏った煉樹の剣で思い切り貫かれた。
「霊体なら、修復できるわよね・・・？」
「刺しておいてその言いようはないだろ。取り合えず抜け」
煉樹の剣を抜いてもらうと、俺は乾坤の気を使った応用型霊術に入る。
乾と陽、坤と陰。扱い辛いか容易（たやす）いかで使い手の違う二つの力。これをうまく利用し、霊体の欠けた部分を修復するのである。治療が単純で、自分の命の重さが全く感じられない時間。俺は、これが割と嫌いだ。決闘も、それほど好きではない。
命をつなぐためと仕方なくやってはいるものの、不快感がある。
「ほんと、すぐに修復できたわね」
「当たり前だ。これくらい出来ないと・・・負傷しても自然回復は起こらないからな」
「へえ・・・すごいわね」
「何がすごいんだよ。あんたらが傷に薬を塗っておくのとそう変わらないぞ」
パンパン、と服をはたいて呟く。
「そんなものなのかしらね」
「それより、こいつらどうするよ。伸びてるし」

二人を指差して、煉樹に聞いてみた。
が、どっからか出てきやがった男の所為で、無視だ。ひっでぇ奴。
「・・・煉樹。そろそろ、伊吹の部隊が帰って来るぞ」
「あ、うん。じゃあ、また」
「ちょっと、待てって！話はまだ・・・」
勝手に現れて、勝手に攻撃しかけてきて、勝手に去っていきやがった。
何だあいつら。
「とりあえずこいつらを何とかしないと・・・」
周りから少しずつ生命の片鱗を搾取し、小町と四季映姫にあてる。
「・・・っ」まず、四季映姫が目覚めた。
「いつつ・・・」次に小町が背中を押さえつつ起き上がってきた。
「よう、大丈夫か？」
「え、ええ。ところで、煉樹は？」
まだ少し辛いのか、足を押さえて座っている四季映姫。
「さっきの男と勝手に消えた。なんだったんだろうな」
「風のように去っていったね。あの二人」
小町は平気なようで、立って服の汚れを掃っている。
「まあ、そういう人ですから。仕方ないですよ」
「で、男のほうの名は？」
「確か・・・『神音　絶』だったような・・・」
「名前からして強そうだな」
「そうかい？あたしは、そうは思えないけど」
「幻想郷でおそらく最強かと思いますが」
「へぇ・・・すごいですね」
「最強・・・か。欲しいままに出来るとおいしい肩書きだな」
「たしかに。・・・では、本来の目的地へと向かいますか」
立ち上がり、四季映姫は俺に言った。
「他にあったのか」
「白玉楼と話がつきました。彼方を、受け入れるそうですよ」

それを聞いた直後、少し、寂しい気分になった。
俺は耐えることができず、口を開いた。
「・・・なあ」
「なんですか？」
「俺が、小町と一緒に三途の渡し番・・・出来ないのか？」
「奏・・・？」
疑問符が小町の頭に見えるのは気の所為だ、気の所為。
「ただの執着かもしれない。ただ、小町は、あんたが許すなら俺がいてもいいって言ったんだ。・・・小町、迷惑じゃないなら、あんたの仕事を手伝いたい」
本当に、そう思っていた。
小町と、いたい、と。
俺は、この身体になって初めて会ったのがこいつだったんだ。
「奏・・・！」
小町は、なにやら感無量と言った様子だった・・・が。
「だめです」
四季映姫は、冷たかった。
「・・・理由を、聞かせてもらおうか」
「霊体たる彼方が、安易に断罪前の魂の近くに存在する事は、危険だからです。魂は肉体と離れると、未練があるものは他の者の霊体を使ってでも顕界に帰ろうとする事がある。自殺行為です」
だったら何だってんだ。
そんなのわかってる。それなりに魂に触れていると、そんな感覚は輪郭だけだがわかるようになる。
「構わん。俺は、あの橋を超えたときから消滅の覚悟は出来てる」
「・・・っこの、愚か者が！」
突然、四季映姫が叫ぶ。
「な、なんだと！？」
「彼方は何の未練もなく消滅できるでしょうが、残された者の事を案じなさい！　例えば、小町が数日とはいえ共に生活した彼方の消

滅を、無関心でいられると思っているのですか？！」
　なんか・・・感情的になりすぎてねぇか？
だが、それはこっちもだ。
「何で小町が俺の・・・俺なんかの消滅で感傷を持つ？！」
「やめな、奏！・・・あんた、自分を軽く、見過ぎなんじゃないかい？」
言葉の意味はどうであれ、小町は、俺を静止した。
「お前は、よほど近くに行かないと、気づいてもらえないような、誰にでも同じ態度をとる奴だと思っていたが、違ったか？」
「・・・生憎だったね、あたいは・・・・・・・・」
　わかってる。何が言いたいか。でも、それは、こいつの口から聞きたかった。
全てを、覚悟の上で。
そう、少なくとも、このときだけは。
「・・・小町、無理して言わなくていい。躊躇うようなことだったら、覚悟が出来てから言え」
「・・・・・・・・・」
「わかりましたか？小町の事を案ずるなら、白玉楼に行きなさい。『幽明結界』までは案内します」
決定事項、ってわけか。まあ、俺もそのつもりになったし、行ってもいいか・・・。
「あ、ああ・・・」

その後空を数時間飛び続け、幽明結界の前にやってきた。
「此処から先は、私たち『断罪者』の管轄外です。あなたは、この上を乗り越えてまっすぐ進みなさい。白玉楼はその向こうです」
「おう。じゃあ、またいつか。必ず顔を見せるなり手紙的なものを送るからな」
「そうしてくれると嬉しいね。白玉楼は季節の変わり方が緩いらしいから、冬に桜の花びらなんて贈ってくれると気が晴れるね」

「任せろ。ちゃんと送ってやる」
「小町、行きましょう。・・・仕事が、山ほどあります」
「え？！　代理の渡し番がやっててくれたんじゃないんですか？！」
「その代理が、過労で倒れたのです。それ以降の代理渡し番が配属されなかったので」
「はぁ・・・。じゃあ、奏。またいつか」
「小町も、過労で倒れんなよ」
「それはないね」

「小町」
「何でしょう？映姫様」
「大丈夫ですか？」
「何がですか」
「奏がいなくなって、寂しくはありませんか？」
「ええ、多少は」
映姫は、その声にどこか空元気のようなものを感じた。
「本当に、多少程度ですか？」
そして、それを案じて、小町にさらに追求した。
「はい。こんなことでめげてちゃ渡し番失格ですから」
今の小町は、笑顔すら痛々しい。何かを隠しているのが、よくわかる顔をしている。
哀れみでもなく、同情でもなく、部下と上司の関係を無視して、映姫は小町に優しく語りかけた。
「・・・こんなことで嘘をついても、何の得にもなりませんよ。・・・・・・寂しいのでは、ないですか？」
「・・・・・・・・・そんなわけ、ないじゃないですか・・・っ」
それでもなお、彼女は気丈に振舞った。
「泣きたいなら泣きなさい。それもまた強さ。貴女が我慢しているところなど、見たくはありません」
「っふ、ぅえええん、映姫様ぁぁ」

「哀しいのは、奏を想っているから。大丈夫ですよ、その想いは、
きっと届いています」

ａｒｅｎｅ：ｔｒｏｉｓ　冥界・死の舞踏～Ｔｏｔｅｎｔａｎｚ．

「ここが・・・幽冥結界・・・」
ありえん。でかい。ここをどうやって通れというのか。
「あ・・・あのー！」
ん？上から、なにやら声が・・・？
「虹川　奏様ですよねー？」
「そうだが！」
「ちょっと、こちらへ来てくださーい！結界沿いにまっすぐ上へ！」
指示されたとおりに結界に沿って上へと向かった。
それにしても長いな・・・
やがて一番上が見えてくると、白い髪の少女がこちらに手を振っている。
「ようこそ、冥界・白玉楼へ。私は、ここの庭師も勤めている『魂魄　妖夢』と申します」
「ああ・・・よろしくな、魂魄嬢」
手を伸ばし、握手を求めてみた。
「妖夢で結構です」
だが、軽い会釈でスルー。何だこいつ？
「そうか。・・・で、俺はどうすればいいんだ？」
「まず、私について来て白玉楼へ向かって戴きます」
「わかった」
この妖夢とかいう娘は、口調も固いが態度もがっちがちだな。
礼節は大事だがここまで来ると鬱陶しいの一言に尽きる・・・。
それにしても、妖夢の後ろになぜかわからんが霊魂がついてきている。
「なあ、その後ろの霊魂は何なんだ？」
「私の一族は、みな半人半霊なのです。この霊魂は、私の半霊です」

「なるほど」
不思議な一族もいたもんだ。まあ、「幻想」郷だし、仕方ないといやあ仕方ないんだろうけどさ。
それにしても、桜が綺麗だな・・・。
ていうか階段があるんだから歩きたい気分になるよな。
いや、まあ、長いからやっぱいいや。

「これが？」
「はい、冥界の霊魂が集う場所、白玉楼です」
あまりにもすごいので圧巻。まるっきり和風。ていうか妖夢がなじみすぎて怖い。
「こちらへ。主がお待ちです」
「あ、ああ・・・」

「幽々子様、奏様をお連れしました」
「入って頂戴」
扉ではなく、ふすまを妖夢は開いた。
「こっちこっち～」
「ん？」
部屋の正面ではなく、向かって右の掛け軸の近くにある机に、そいつは座っていた。
幽霊の象徴・・・というか大体、幽霊についてる・・・なんていうんだっけ？あの頭につける三角のあれ。そこに、ドリキャスのマークみたいなぐるぐるのが入ってる。
服も左前の和服のような服で、『死者でーす』ってアピールしてるみたいな感じだな。
なんというか、妖夢よりは年上だがまだ少女とは呼べるくらいだな・・・顔とか。
そのくせして、何か雰囲気に艶やかというか妖艶というかそんなものが感じられる。

しかし・・・なんでこいつは口に両手に紅白餅抱えてんだッ？！
「幽々子様・・・お菓子は客人が来られてから、と言ったでしょう？」
「もう、妖夢ったら何言ってるの？『食欲魔神』とあらゆる料亭で恐れられた私が、目の前にある食べ物を我慢できるわけないでしょ」
「食欲魔神だと・・・！　小町に聞いた話では、『幻想郷中の料理処の食材を一ヶ月連続で空にした』という謎の女・・・！」
「あら？そんなに尾ひれがついてたの。実際は、『幻想郷中の料理処の食糧庫を一ヶ月で空にした』幽霊よ？」
「それでも充分です、幽々子様」
「そうかしら。まあ、あなたたちも座って一緒にお餅食べましょ」
「ないぞ」
「あらら・・・。妖夢、まだお団子があったわよね？持ってきてよ」
「・・・畏まりました」
妖夢が、小走りで菓子をとりに行った。
「私ね・・・こんな姿だけど・・・多分もっと年をとってから死んだと思うのよ」
「・・・そうか」
「何でかな。一番、このくらいの年のときが幸せだったのかな。今でも、そんなこと考えるときがあるのよ」
「わからん。俺は、何で死んだか、いつ死んだかも知らないから・・・あんたに、答えの例はやれん」
「ふふ、答えなんて求めてないわよ。暇つぶしに、そんなこと考えてるの」
「つまらないな。そんなことを考えるなんて」
「・・・もう。あの人と、そっくりなんだから・・・」
「だれだそれ」
「神音　遥・・・私が、死んで初めて好きになった人よ」
「神音だと？」
「その人の兄妹には、『柚子』って女の子と『絶』って男の子がい

るわね」
「・・・・・・」
「似てる。口調が。すっごく。・・・思い出して、悲しくなる」
「その・・・たぶん。たぶんだぞ。今のあんたの目の前に、その遥とかいう奴がいたら、こういうだろうな、っていうのを思いついたんだが」
「・・・・・・言ってみてよ」
「『すまない、幽々子。悲しませるつもりはなくとも、お前を悲しませてしまって・・・だからと言って、お前のことが好きとかそんな事はないからな。』」
「似てるわ。とっても・・・。好き、って言ってくれないところとか・・・というか、慰めのつもりで、そんなこと言ったの？」
半泣き半笑いで、幽々子は聞いてきた。
「あー・・・特に、そんなつもりは・・・」
「じゃあ、なに？」
「興味本位、というかあんたの反応を見てみたかったというか・・・」
・・・うそだよ。確実に慰めの類だろ。
それを察したのか、幽々子は、
「ええ、とてもとはいかないけれど、気が幾分か晴れたわ」
「・・・そうか」
見かけより切れ者だな、コイツ。
「幽々子様。失礼します」
「あ、妖夢」
妖夢が表情の一つも変えずに、団子の大量に載った皿を机に置き、辞儀をして去ろうとした。
何でだろうな。そのときの妖夢は、何かが張り詰め過ぎていて、切れてしまいそうな危うさが感じられて、俺は何だかいたたまれなくなった。
直前で、俺は妖夢を呼び止めた。

「なあ、妖夢」
「何でしょう」
「ちょっと、決闘でもしないか？」
「・・・幽々子様」
妖夢は、幽々子に許可を求めた。
「・・・そうねぇ・・・いいわよ。ちょっと、剣を振り回してすっきりしてらっしゃい」
幽々子も、俺と同じことを感じ取ったみたいだな・・・。こいつ、見かけや言動より聡明な奴なのかも・・・？
「では、慎んで御受け致します」

「改めて。俺の名は・・・『霊奏の指揮者』虹川　奏」
「『幽人の庭師』、魂魄　妖夢」
「そっちからかかって来い」
あくまで後手派。
「先手・・・必勝！」
俺が言う前から、妖夢は二本の剣を抜き、走ってくる。
「霊魂が多い・・・よし！」
俺は指揮棒を振り上げ、霊魂を自分の指揮棒がない方の手に収束させる。
妖夢が短いほうの剣で細かく突きを入れてくる。
霊魂・・・正確に言えば霊魂の持っていた生命エネルギー・・・を固めた手でそれを受けて、さらに指揮棒で砂を妖夢の足下だけ柔らかくして動きを封じようとしてみる。
「・・・はぁっ！」
妖夢は軽く跳躍し、長いほうの剣を振って霊力の篭った衝撃波を放ってきた。
「ちっ！」
砂を盛り上がらせて妖夢の足を追うも、敢無(あえ)く失敗。妖夢に一蹴されて砂が砕けた。

俺は衝撃波を指揮棒で風を操り中和、取り残された霊力は妖夢を追わせ、次の動作に備える。
「これで！」
砂で足場が悪いにもかかわらず妖夢は踏み込んでくる。
「っ？！」
間一髪かわしたかと思ったが、腕を持っていかれていた。
傷・・・と呼べるかは霊体の俺には不明だが切り口から白い霊体の破片が零(こぼ)れる。
「くっそ・・・！」
周囲にあった霊力を無理やり使って腕をつなぐ。
「未来永劫斬！」
つなぎきる前に幾条もの白い光が俺を切り刻んだ。
消滅する前に何とか命をつなぎとめようと、周囲の霊魂のエネルギーを取り込む。
「ちぃっ！」
修復した直後、
「閃々散華！」
無数の桜色の光が俺を取り囲む。
妖夢の姿はなく、非情なまでに多いその光に俺はただ砂を卵状に固めて作った壁を張っただけだった。
「いつまで持つか・・・？」
一応地面からの補充は欠かしていないが、それも時間の問題。俺の力が途切れたらそれまで。
攻撃の手が緩まったとき、俺は妖夢を追跡するように指示していた霊力を開放、爆破する。小町譲りの、『未練がましい浮遊霊』の派生系だ。
「ぐぅっ？！」
妖夢が攻撃を受けたと認識した直後に壁を解き、砂で巨腕を作る。
妖夢が立ち上がる前に手を広げた砂の巨腕で押しつぶす。
そのまま吹いていた風を操って砂嵐。

「いっけぇ！」
砂嵐に呼ばれてきたのか、雨も降り始めた。
「――――雨、砂と交わり、重さを持つ――――――」
凝固した砂に凄まじい数あたり、妖夢は声も出ていない。
「――――――踊るには、相性の悪すぎる二つだな？――――――」
俺が呟けば砂嵐は止まり、見事に上からの砂玉が妖夢に命中。
倒れた妖夢を肩に抱えて、砂嵐の跡から連れ出す。
「勝負あり・・・。やっぱり、ちょっと調子に乗りすぎたか・・・？」
白玉楼の美しい砂の庭園は、見るのも憚（はばか）られる程に凄惨な状態のまま放置された。

「幽々子、妖夢をつれて来た」
「あら？ぼろぼろね。彼方がやったの？」
緑茶を幽々子は啜っていた。暢気そうに。何だこいつ。
「決闘だ」
「彼方がやったんじゃないの」
「まあな」
幽々子が妖夢の耳元で、囁き始める。
「・・・妖夢、起きて。起きないと・・・」
「ひゃぁっ！お願いですから耳だけはっ・・・！」
「お、お目覚めか」
「おはようむ～」
「・・・その挨拶はいい加減やめてください幽々子様・・・」
「いいじゃないの、減るもんじゃなし」
「・・・私の威厳が減ります」
「半人前に威厳も何もあったものか」
「な、何だと・・・！」
妖夢が戦闘態勢に入る。
俺が気にするわけもなく・・・。

「・・・妖夢、少しその剣を鞘に入れたまま振ってみろ」
「・・・？」
いわれたとおりに、鞘ごと腰から短い方の刀を抜き、振る。
かちゃかちゃ、と音がした。
「本当に偉大な剣豪の剣を鍛える刀匠は、抜くものに滑らかな抜刀ができるように、鞘に遊びを作る。その刀の遊びも、作為的なものだ」
「・・・で？」
「本当に偉大な剣豪は、お前のように寸分の狂いもなく太刀を振る。だが、その性格は極めて明朗快活、自由奔放なのが多いんだ」
「・・・だから？」
「妖夢、お前には『遊び』が足りん。迷いをなくそうと、前だけを見つめすぎている」
「・・・！」
「その顔・・・師にも同じ事を言われた・・・といった所か」
「な、何故それを！」
「わかるさ。固いところはとことん固い。柔らかいところは少しつつけばすぐ揺らぐ。お前は、隙がなさそうでありすぎる。余裕がないと、そのような欠点が顕になってしまう」
「そ、そんな事は・・・」
「ある。太刀筋が真っ直ぐ過ぎて、かわすのが容易なところも、お前の弱点だ。もう少し、まわりを・・・そうだな、例えば幽々子あたりを見てみろ。強者の気迫を多少なりとも持ち合わせながら、周りばかり見ている。目の前にある食べ物を我慢できないことが、その証拠だ」
「私はただ単に食への未練が強いだけよ～」
「いいさ、それでも。お前は強いんだから」
「うふふ、ありがとう」
「で、妖夢。お前には、『遊び』・・・正確に言えば、『戦うことへの余裕』が足りない。これがないと、刀匠の意思・・・刀の全力

を出し切れないぞ？」
「・・・みょむ・・・」
「みょむ？なんだそりゃ」
「くすくす、それはね、妖夢の口癖」
「そうか。口癖なら仕方ないな」
「え、また言ってました・・・？」
「ああ、無意識ってものの面白さが今やっとわかった気がする」
「でしょ？　多分、二十年くらい後にその無意識が役に立つのよ」
「気が遠くなる話はやめてくれ」
「二十年くらい我慢ですよ。私がこんなになるまでは・・・っと、『淑女たるもの、みだりに歳をひけらかすなかれ』でしたね・・・」
「師匠の教えか・・・」
「ええ、そうなんです。お爺様・・・いえ、お師匠様が仰っておりました。『歳を明かさなければお前は若く見えるのだ』と。どうでもいいですが、相手の油断をつくのが狙いで歳は明かさないんです」
「歳を重ねている＝経験豊富、と言うことか。確かに、その姿なら並みの妖怪なら弱いと思うだろうな。まあ、多少強さを感じ取る事が出来る者なら、すぐにわかるだろうがな」
「まあ、霊体って私みたいな老いを知らない身体なんだから、二十年なんてあっという間なのよ」
「そうですね。幽々子様なんてもう今年でひゃ・・・」
「妖夢。耳食むわよ」
「・・・申し訳ございません」
「なんだ？　妖夢。お前、耳が弱いのか？面白い奴だ」
「なっ、そんな！」
「そうなのよね・・・はむぅ」
妖夢の耳に、幽々子は噛み付いた。というか、おそらく甘噛みだろうが・・・。
「ひゃぁぁんっ！」
その後、さらに幽々子は後ろから妖夢に抱きついた。

どこを触ってんのかは、まあ、よくわからんが、妖夢の顔が真っ赤だ。それに、何か恍惚としている。
「駄目ですよぉ・・・奏様が、いるんですから・・・幽々子様ぁ・・・」
「妖夢ったら可愛いわねぇ・・・。あっちの部屋に行きましょうね～。あ、奏くん。この辺を適当に回ってるといいわ。今日は、タイミングよく楽団が来てるからそれを見てもいいわね。じゃあねぇ～・・・妖夢～はむぅ～」
「んぅっ！」
妖夢の耳を食みながら幽々子は部屋の外へ消えた。
「あー・・・ちっ、どっか行きやがった・・・」
仕方ない、楽団とやらを見に行くか。

arene：quatre　邂逅の狂詩曲～Rhapsody in Blue

冥界の市街地と白玉楼、二つから離れた（おそらく治安上の問題）場所にある特設ライブ会場に、俺はやってきた。

「どもー、こんにちわーっ！」
「私達、『騒霊楽団』っていいまーす！」
「今日はロック、ポップ、ジャズと楽種を問わずやっちゃいますんで、皆さん楽しんでくださいねーっ！」
『――――――！』
何なんだこの盛り上がりようは・・・。
何でこんなに人気なんだ？
隣の霊に聞いてみた。
「なあ、この三人は何なんだ？」
すると、こんな答えが返ってきた、
「もぐりかこいつ！　おい、こいつ新参だぞ！」
「なんだと！　貴様、知識も無しにここにいるのか！」
「始めからライブとは・・・許さんっ！！」
「ちょ、ちょっと待て・・・っうわあああああ！」
あっという間に霊どもに担がれ、持ち上げられた。
そして運ばれた先は・・・
「ちょ、おまえら、何考えて・・・って、あれ？」
「・・・はじめまして。さっき裁かれたばっかりなんだよね？　私達のこと、覚えていってね？」
「お、おう・・・俺も、音楽はその・・・嫌いじゃないというか、むしろ好きなほうだからな・・・まさか霊にもアーティストがいるとは思わなかったぞ」

「ん？　記憶、残ってんの？　意外だね。・・・あ、まさか君が、最近幻想郷でうわさになってる『霊体の子』？」
「ああ・・・そうだが。それにしても、噂になっているとは思わなかった・・・」
「じゃあ、だんだんファンの人達の視線も痛いだろうから、ライブはじめちゃうよー！」
『わ――――――っ！』

何と言うか、ライブは予想以上にすごかった。
聞いていると、気分が晴れたり、逆に落ち込んだり、とにかく『楽しい』の一言に尽きる。
というか、本当に楽種問わないんだな・・・。

ライブが終わって数十分。
霊たちは気分の高揚も収まり、当の騒霊楽団たちは、冥界見物に行ってしまった。
「ん・・・？　何の声だ・・・？」
霊たちとは違う、まるで俺だけに聞こえているような澄んだ声。
そして、嘆いているようにも聞こえる。
『私達も・・・奏でて・・・』
『弾いて・・・お願い・・・』
『三人しかいないからって・・・』
何？三人だと？
あの騒霊楽団の事か・・・？
「取り敢えず行くか・・・」

まだ解体されていないステージ。明日もやんのか・・・？
「えっと・・・こっちから聞こえたよな・・・？」
『私達の声が、聞こえるの・・・？』
『聞いてくれるの・・・？』

「ああ、聞こえるさ。どこにいるのか、教えてくれ」
『すぐ前にいるよ・・・』
『貴方の、すぐ前だよ・・・』
「すぐ前っていうと・・・」
楽器だけ・・・。こんなのがしゃべるはずないし・・・。
『しゃべるよ。楽器だって、使われてなくたって。大事にいっつも持って行ってくれるんだもん』
『そうだよ。ちゃんと、いつもいつも全てのライブに持って行ってくれるの。それなのに、あんまり傷ついてないでしょ？大事にされてる、証拠』
『霊具だもん。喋るよ？』
喋っているのは、今回使われていない『トロンボーン』、『シンバル』、・・・そして『マリンバ』が一組。あと、古びた『ヴァイオリン』が六本、『クラリネット』が三本。・・・まあ、他にもたくさんいるな・・・。
それにしても霊具だと？小町に聞いた話では、高純度の霊力に長時間さらされることで出来るもんだと聞いたが・・・
「お前ら。ちょっと聞いてもいいか？」
『いいよ。何？』
「他にも、お前らみたいなのはいるんだな？」
『うん。ほんとは、オーケストラが出来るくらいいるの。でも、私達以外全員お家に置いてきちゃった。マスターが、持ちきれないんだって』
「ほう。・・・じゃあ、お前らは俺の指揮が読めるか？」
『じゃなかったら、そんな『指揮者の気配』のする霊体なんて呼ばないよ』
「そんなのが出てんのか？実感ないな・・・」
『現にいま、指揮棒を持ってるでしょ？』
「ま、まあな・・・」
『ほら、振って。私達に、音楽をさせて』

いきなりそんなことを言われても。
と言いつつ、風の作る台に上り、ついつい構えてしまう。
「楽譜がないぞ・・・？」
『フィーリングフィーリング。あんまり曲とか気にしないからジャムでいいよ』
「感覚演奏・・・まあ、いい。今さっきちょっといい感じの曲を思い出した」
『おおっ？じゃあ、やっちゃうよー？』
こつこつ、と譜面台を叩き、白い指揮棒を振り上げ、演奏開始。

「まだだ。クラ2、焦りすぎ。ヴァイオリン1、コンサートマスターが遅れをとってどうする」
『指示が的確だね。どこで覚えた？』
「才能さ。・・・っと、そこ、シンバルを忘れない！」

一通り冥界見物を終えたプリズムリバー三姉妹。
戻ってきてみれば、さっきの霊体の少年が使われなかった楽器達を見事に使いこなしているではないか。
「おお？　あれは・・・」黒い服の少女が、細い目を凝らしている。
「さっきの子だね。あの楽器、確か壊れてて・・・」白い服の少女が、思い出したように呟いた。
「ううん、あれは、多分壊れてなんかなかったんじゃないかな」赤い服の少女が、何かを見つけたように言った。
「それにしてもこの曲・・・」
「『Ｔｈｅ　Ｒｈａｐｓｏｄｙ　ｉｎ　Ｂｌｕｅ』・・・ジャズな狂詩曲。なんとなくだけど、あってる。・・・昔、レイラとよくやったよ」
「懐かしいね。これ、どうしてあの子が知ってるんだろうね」
「うん。じゃあ、ちょっとしばらく聞いてみる？」
「そうしようそうしよう。たまには聞く側も悪くない」

「っと、コントラバス、調をあわせてごまかそうなんて甘いぞ！」
『ちぇー、ばりたか』
「チェンバロ！　走りすぎ！」
『うぃ』
「半音外すな、トランペット！　曲が死ぬ！」

そして演奏し終わってから。
「さて。これで満足か、お前ら」
『うんうん。大満足』
『最高に楽しかったよ』
俺が指揮棒を懐にしまうと、
「素晴らしい演奏に拍手！」
白い服の・・・確か、メルランとかいったような。まあ、そいつがぱちぱちと手を叩いている。
「不完全ながら、たったこれだけの楽器でここまで高められるとは」
黒い服・・・えっと、ルナサだっけ？腕を組んで頷いてやがる。
「いいねいいねー。懐かしい想いに浸れたよー」
赤い服。こいつは覚えてる・・・リリカ・プリズムリバー。ひときわ大量の楽器を操っていた。
「・・・勝手にあんたらの楽器を使って、すまなかったな。謝る」
「いやいや、いいよ。私たちも、なかなかいいもんが聞けたと思ってるから。・・・ところで、指揮してたときに、誰と話してたの？」
「えっと・・・聞こえなかったか？　こいつらの声。この楽器は、『霊具』なんだが」
「『霊具』？！　そんな珍しいものがこんな近くにあるとは・・・」
「予想だにもしなかったね。全く」
「でもさ、この子にちゃんとした楽器を与えたらさ、すっごくいい音が聞けると思わない？」
「思う思う！」

「・・・というわけで、私たちはしばらくここにいる。その間に、気が向いたら遊びに来るといい」
「そうか？　まあ、なかなか楽しかったし、またやらせてもらえるんだったら、行くぞ」
「大歓迎！　じゃあ、約束ね！」
「・・・・・・ああ。約束だ」
リリカが、握手を求めてきた。
そして、俺はそれに応えてやった。

arene：cinq　冥鍵想奏曲～Waldstein.（前書き）

Waldstein＝ヴァルトシュタイン。
読みづらくてごめんなさい

ａｒｅｎｅ：ｃｉｎｑ　冥鍵想奏曲～Ｗａｌｄｓｔｅｉｎ．

白玉楼へ戻ってくると、それはそれは物静かだった。

「ね、どうだった？　楽団の演奏。冥界ですっごく人気の三人組なんだけど！」

白玉楼の縁側を歩いていると、幽々子が「スパァン！」とふすまを開けて叫んできた。

「・・・まあ、悪い奴らじゃなかったな。話してみると、意外といい奴らだ」

「え？　話したの？　すっごーい」

「そんなものか？　あ、ついでに、明日はあいつらのとこに行く、って約束もしてきたぞ」

「おおっ、流石奏くん！　人脈あるねぇ！」

「・・・煽てても、何も出ないぞ」

「そんなことは多少しか考えてないって」

「多少は考えてるんだな」

「まあねー。・・・ところで、奏くん」

「何だ？」

「この白玉楼で、何の仕事につきたい？」

「・・・どんな仕事がある？」

本当に聞きたかったのは、『仕事なんてあるのか？』だが、まあ、そこは伏せておく。

「そうねぇ・・・いっぱいあるわよ。遥の抜けた砂絵とか、庭師の補佐とか、冥界の市街地監督とか」

「く・・・多いな、もうしばらく考えさせてくれ」

「別に、急ぐ話でもないし～。まあ、ゆっくり考えてね！！」

背中をばん、と叩かれて、部屋の中が少し覗けた。
「ぁ・・・」
「よ、妖夢・・・？」
そこには、布団に横たわってばててていた、あられもない姿の妖夢。
「っ！！」
「・・・・・・奏くん、これは夢だからね」
どすっ。
後頭部に鈍痛が奔ったと思ったら、俺は意識を失って――――――――――――――――

「ぅ、ん～」
奇妙なうなり声をあげ、不快な目覚め。
「あ、気がつかれましたか」
「よっ、妖夢？！」
「どうなさいました？　何か、悪夢でも・・・？」
「い、いや、さっきまで、ものすごい格好で・・・」
「何のことでしょう」
「え、でも、幽々子の出てきた部屋・・・」
「夢があまりにも現実的だったんでしょう。もう少し休まれては？」
その背中の「かちゃり」と言う音と、全身の全力の殺気で、理解。
この件には、一切触れないのが無難だと。
「そうだな・・・そうさせてもらう」
「では・・・お休みなさい」
妖夢が出て行く直前、こっちを向いて、悪魔の形相でこちらを睨み、
「先程の件は、他言無用でお願いします、奏さん」
「・・・・・・ああ。誰かに言っても、仕方ないしな」
「では」
ふすまを、音もなく閉め、妖夢は出て行った。
「・・・・・・・・・・」
それなりに怖かったな、妖夢の奴・・・

しばらくして、幽々子のいた部屋を訪ねた。
「・・・幽々子」
「あ、奏くん。調子はどう？」
「まあ、別に悪くはないな・・・ただ」
「なに？」
「ここの夜は、静かだな・・・いつも川の音がしていた、彼岸とは大違いだ」
「そう？　彼岸は、行った事ないからなぁ・・・」
「・・・・・・滅ばない、ってどんな気分なんだ？　ほんの一ヶ月程度じゃ、まるでわかりゃしねぇ」
「・・・・・・そうね、何ていうのかな・・・『孤独だけど、孤独じゃない』って感じかな」
「全てを見据えれば孤独かもしれないが、一瞬と向き合えば満ち足りている、ってことか？」
「まあ、そんな感じ。・・・妖夢がいなきゃ、私、今多分西行妖の憑き霊になってたかも」
「そうか？　でも、遥がいたろ？」
「そうよね・・・妖忌と同じ頃に、遥は白玉楼に来たんだっけ。懐かしいなぁ・・・」
「妖夢もつれて？」
「ええ、確かそう。その頃の妖夢は、三歳児くらいの大きさだったかな・・・もうかぁいくってかぁいくって、一日中妖夢をなでくりまわしても飽きないくらい愛らしかったわ～」
「いや、それは流石にないだろ・・・常識的に」
「例え例え。・・・明日、あの楽団のとこに行くんでしょ？　楽しんできてね。彼女たちの『友達』として」
「そんな大それたもんじゃねぇよ。『知り合いの指揮者』みたいなもんだ。それに、あいつらはまだ仕事が残ってるしな・・・巳の刻辺りに行ってみるか・・・」

「あ、お煎餅あるけど食べる？」
「茶を入れてくる。全部は食うなよ？」
「わかってるって。行ってらっしゃい」

そして、俺と幽々子は耽る夜の月を、煎餅を齧りつつ眺めた――――――――――――――――――――――――。

次の日、巳の刻・・・俺は幽々子から教わったプリズムリバーの宿泊先を訪ねた。
まず、軽くノック。
『はーい？』
「虹川　奏、だ。今、時間はあるか？」
『おお、奏くん。遅かったねぇ、さあさあ入って』
「邪魔するぞ」
何で『遅かった』なんだ？　もっと早く来るとでも・・・？　と疑問を抱きつつ、ドアを開いた。
「・・・いないんだが」
いや、ほんとに、あるのは上行きの階段があるただのリゾートホテルの一室みたいなもんなんだが・・・誰もいない。本当に、誰もいない。
『階段の上だって！　びっくりするよ～』
「・・・・・・早々驚いたりしないんだがな、俺は」
自信はあるぞ。小町の距離を動かす能力にも驚かなかったしな。
そして、俺は階段を上がり、すぐにある厚くて重い扉を開いた。
そこにあったのは――――――――――――――――――――――――――。

「やあ奏くん。冥界の演奏ホールへようこそ！」
「ここじゃないと、フルオーケストラは入れられなかったから」

「君の実力を拝見、と行こうか！」

演劇やオペラ、クラシックコンサートで使われそうなくらい、大きなホールだった。

いや・・・ねぇよ・・・この広さはねぇよ。

まじで驚いた。ありえねぇ。広すぎだろこれは。

「どう？　すごい？」

黒の糸目・・・ルナサ、だっけ・・・まあ、そいつが俺に感想を求めてきた。

「驚いたでしょ？」

その隣で、リリカが俺に問う。

「あ、ああ・・・すごいな、ここ。お前らの隠れ家か何かか？」

「ん～、まぁ、そんなとこ。年に一回くらい来るんだけど、毎回ここで滞在してるの」

「で、早速だが・・・やらせてもらっても？」

「どうぞ、オーケストラは準備してるから、がんばってみ？」

「任せろ。昨日、一つ聞いてきたのが気に入ってな・・・それをやらせてもらうぞ」

「なんて曲？」

「『ベートーヴェン　ヴァルトシュタイン』」

「ピアノコンチェルトとは・・・これまた・・・。それが気に入ったとなると・・・天才の類、かな？」

「当然」

指揮台に立ち、軽く指揮棒を振る。

『昨日の指揮者くんじゃないか！　奇遇だね・・・今日も、やんのかい？』

「ああ。思いっきり楽しんで弾けよ、いいな？」

『っしゃぁ！　なんか乗ってきたぁぁぁ！』

「二、三台のピアノがはしゃぐな」

全体で少し音を出させる。
こうすることによって、え～っと、なんというか、その、まぁ、・・・感覚みたいなものを研ぎ澄ますんだ。一気に来る音楽を、感じると言うか、そんなとこだ。

「すぅ――――――――――行くぞ！」
『合点！』

《それでいい》
あくまで観客（三姉妹）に注意がばれないように目配せだけで指示。であるにも拘らず楽器達はそれを的確に修正。全く、どこで覚えたんだか、そんなこと・・・
《もっと拍子を落として》
このトロンボーン、何考えてやがんだ?！
全体の音楽が乱れてくるだろ！！
《来るぞ・・・1，2，3・・・思いっきりやれ！》

「いやはや、メンバーが足を引っ張り合っているような感じだね・・・」
「仕方ないよ、家から急いで連れてきた子たちだもん。演奏なんて、三十年ぶりくらいだよ」
「じゃあ仕方ないよね～。それにしても、指示が早い、正確、流れの読みも天才的。うちに招き入れたいくらいだよ」
「・・・それだけじゃないくせにぃ」
「それだけだよ?！　断じて一目惚れとかそんなんじゃ・・・」
「誰もそんなことは言ってない」
「墓穴墓穴～！」
「そんなことないもん！　姉さんたちの馬鹿！」
「ふふ、そんなこと言って・・・でも、あの名前・・・」

「お爺様、でしょ？　私も気になってたんだ」
「『メロディ・プリズムリバー』・・・楽師だった、お爺様のステージ上での名前？　似てるけど・・・」

そして、取り敢えず演奏は終了。
まじで疲れた・・・霊体にも疲労っていうのは、あるのか・・・それとも精神的疲労がそのまま疲れに感じるのか。
「おつ～」
リリカと軽くハイタッチ。
「おう。で、どうだった？」
「演奏側がグダグダだったけど・・・まあ、指揮は１００点中９９．９９点、てとこかな。今一歩、リズムが掴めてないところがあった。それ以外は、ほとんど完璧。申し分ないよ」
ルナサが、具体的かつ絶対的な評価を下す。
「うん。完璧。指揮者として、申し分ないね！」
メルランは、ベタ褒め。そこまで言わなくてもいい気もするが。
「・・・・・・やっぱり。私の思った通り、天才の類だよ。どう？　うちでサポメンする気はない？」
リリカは・・・どうやら引き抜きを考えているらしい。
いきなりは決められれん。もうちょい迷わせろ。
「まあ、考えとく。取り敢えずは一通り冥界をめぐって、どんな職業があるか見なきゃいけないしな」
適職だからと、一概に決め込んでしまうのは勿体無い気もした。だから俺は冥界の仕事を、ある程度見てから決めるつもりでいた。だが最後に決まるのは、恐らく楽器関係だろうが。
「ふぅん・・・あ、私たちもナイトライブのリハがあるから、そろそろお開き、ってことで・・・」
「そうか。少ない時間を割かせて悪かったな。じゃあ、俺はこれで」
「じゃぁに～」

「また、今度ね」
扉は、さっきより少し重かった気がした。
階段は、さっきより少し急だった気がした。
誰もいない部屋は、さっきより少し殺風景な気がした。
・・・なんでだろうな。この、疎外感と言うか、孤独感と言うか・・・。
部屋の扉を開き、廊下を歩き初めて十秒。
「奏くん！」
後ろから、さっき聞いた声。
そして、走って近付いてくる音。
振り返れば、そこにいたのは、赤いキーボーティスト。
「はぁ・・・はぁ・・・明日、空いてる？」
「あ、ああ・・・」
えらく必死だな・・・。何でだろうな・・・？
でも・・・確かに、そのとき、俺は安堵を覚えた。
何でだ・・・？　それは、俺にもわからん。
「辰の二つ・・・西行妖に来て。貴方より、私、冥界を知ってると思う。案内したげる・・・」
「え・・・？」
「冥界のこと、知りたいんでしょ？　一人より二人、って言うじゃん。だから、さ・・・一緒に、行かない？」
「べ、別に、いいが・・・コンサートは・・・？　いいのか？　明日、ないのか？」
「昨日のは、オープニングセレモニーみたいなので、実際はもっと沢山の楽団とか、バンドとかオケとか集まってるの。で、アタマが私たちの演奏で、後はＭＣ（司会・進行）やってて・・・夜にしかないから、大丈夫だよ」
「そうなのか？　だったら・・・いいぞ。一緒に、冥界回ろう」
「う・・・うん！」
忘れらんねぇな・・・あの時の、リリカの嬉しそうな顔っていっ

たら・・・。
ほんとに、こっちまで頬が緩んできやがる。
こんな感情は、誰にも持ったことねぇよ・・・小町にだって、な。
思わず頭を撫でてやりたくなる。ていうか、軽く抱擁・・・ねーよ！　それはねーって！
「じゃあ、また、明日ねー！」
「おう。またな！」

なんだかちょっと満ち足りた気分の一日だったな――――――――――――――――――――。

白玉楼。
俺の寝室として与えられた部屋。
だだっ広いばかりで家具の一つもありゃしねぇ。
あんまり好きになれない部屋だな・・・。
「奏さん。入ってもいいでしょうか？」
ふすまの向こうに、妖夢がいた。
「・・・呼び捨て・タメ口でいい。入れ」
・・・まあ、見た目近い奴に敬語使われるのも・・・なんかいやだしな。
「・・・・・お邪魔します」
流石に、こればかりは・・・礼儀、と言う奴だろうか。
「奏・・・。ちょっと、出ない？」
「ん？　あ、ああ、いいぞ」

誰もいない・・・ライブにでも言っているんだろうか・・・市街地の隅、小川のほとりを妖夢と歩いていた。
「綺麗でしょ？　私、ここに映る夜の月が、好きなの」
「確かに・・・この何ともいえず揺らめく姿、惹かれるものがあるな」

「うん・・・ねぇ、明日空いてない？」
何だこいつ。
「・・・すまない、予定がある」
「だったら、いい・・・明後日は？」
よくねぇじゃん。ぜんぜんいいと思ってないだろ。
「未定だ。何かあるのか？」
「えっと・・・ほら、まだ冥界に来て日が浅いでしょ？　だから、冥界を案内してあげようかと思って・・・」
リリカと同じじゃん。なにこいつら、すごく親切なのか？
「明日の予定がそれなんだが・・・リリカと」
「・・・・・私にもつきあってよね」
「・・・しゃーねぇな。わかったよ、お前とも行ってやる」
「ありがと・・・」
自分から切り出しといて礼かよ。まじで何だこいつ。
「・・・江戸時代みたいな風景だな・・・川のほとりの、松の木か・・・」
「そうなの？　ここから出たことないから、わかんないな・・・」
「ふ、俺も、二ヶ月前のことすら覚えてねぇ。でも、『知識』とか俺のいた世界の『風景』なら、ほんのちょっとだけ・・・あるんだ」
「・・・・・・・・」
「どうでもいいよな、そんなこと。・・・妙な話をしちまって、すまないな」
「ううん。もっと、奏のこと・・・知りたいもの」
「・・・・・どう言う意味だそれ」
「き・・・気にしないで。別に、深い意味はないから」
わかんねぇ。何が言いたいのか、さっぱりだ。
「そろそろ、戻ろうぜ・・・もう、眠い」
「そう・・・だね」

ａｒｅｎｅ：ｓｉｘ　離別の円舞曲～Ｃａｒｌｓｂａｄ．（前書き）

Ｃａｒｌｓｂａｄ：カールスバート・・・曲名です。
ｓｉｘと書いてありますが英語ではなくフランス語です。
決して怠けてシックスと書いたわけではないです。『シス』と読みます。

ａｒｅｎｅ：ｓｉｘ　離別の円舞曲～Ｃａｒｌｓｂａｄ．

妖夢との散歩のおかげで、快適に寝ることができた。
適度な運動は睡眠を促すんだな・・・と、どうでもいい思索をめぐらせつつ、眠気覚ましに顔を洗いに行く。
本当は寝なくてもいいんだが、そこは気持ちの問題なようだ。
人らしい生活を送ってねぇと、音楽のよさがわからなくなりそうで少し怖かった。
井戸から水をくみ上げ、広めの桶に移して顔をつける。
「ぶくぶくぶく・・・ごぶっ！」
「うりうりうり～」
なにやら後ろで聞き覚えのある声。
力ずくで首を上げて、横に跳躍し指揮棒を構える。
「おはよぉ～」
「・・・・・・幽々子か。朝から冗談交じりに窒息死させようとするんな」
「大丈夫大丈夫、死なないから」
「苦しいんだが・・・あ、今日はリリカと冥界・・・」
そこまで言ったとこで、幽々子が目を輝かせて、
「デート？！　デートなの？！」
言い寄ってきた。うぜぇ・・・
「ちげーよ。リリカは友達だ。冥界を案内してもらえる、って言うから、仕事とかいろいろ見て回ろうかと思ってな」
肩にかけていた布で、顔を拭く。
「妖夢とも行くのにぃ～？」
「それは明日だ。それに、リリカのほうが先だったからな。・・・朝飯は、まだだよな？」
「ええ、後十分くらいでできるって妖夢が言ってたわよ」

「じゃあ、ちょっと手伝ってくる」
幽々子に手を振り、台所のある部屋へと向かう。

「手伝いに来たぞ、妖夢」
「あ・・・奏。じゃあ、もうできてるのを運んでくれない？　幽々子様の部屋まで」
「おう。任せろ」
盆に乗っているぶんの料理を抱え、幽々子の部屋へと向かう。
それにしても・・・ずいぶん多いな、朝から。
どれだけ食うんだ・・・幽々子は・・・。

「持ってきた」
「おおっ、来た来た」
盆を置き、ふすまを開いて「じゃあな」と一言いってから去って行った。
・・・約束の時間も近付いたことだし、そろそろ行くか・・・。

・・・・・と、まあ、着いたはいいが、約束の十五分前到着はないよな・・・。
「はぁ・・・まあ、取り敢えずあいつより先に着いたし、礼儀は守ったな」
などと言っていると・・・・・・・・・・。
「あ、奏くん」
「よう・・・早いな」
リリカ到着。一体何でだろうな？　偶然と言うものの恐ろしさが身に沁みてわかった。
それにしても・・・今日の服装・・・えっと、その。
白のワンピース。普段から横に飛んでるキーボードもいない・・・な。
おかしい・・・何で俺は固まってきたんだ・・・？

緊張・・・ってわけじゃないだろうな・・・まさか、俺に限ってそんなこと・・・そんな、知り合って間もない音楽友達に、緊張だなんて、な・・・はは、は・・・。
うん、気の所為ってことにしとこう。これ気の所為だ気の所為。
「ごめん、待った？」
「・・・・・・まだ十分前だ。そんなに待ってねぇよ」
「そう・・・じゃあ、行く？」
「ああ、そうだな。・・・どこから行こうか」
「そだね・・・じゃあ、縦伍街道から行く？」
「『縦伍街道』？」
聞き慣れない言葉だな・・・一体どう言う意味が？
「この冥界市街地は、『断罪』後の転世も成仏もできない魂達が生活するために作られたのは知ってるよね？」
「ああ・・・知ってる」
それは、まあ妖夢から聞いたし。
「で、なるべく単純にしたいって事で、『キョウト』って都市の『碁盤の目』市街になったわけ。それでいちいち名前をつけるのは面倒だなな・・・って、縦仇、横仇まで街道名が決められてるの」
「へぇ・・・で、白玉楼は・・・その外、ってわけだな」
「そそ。じゃあ、行こっか」
「ああ、そうだな」
リリカの先導に、俺はついて歩いた。

「ねぇ、奏くん。あの指揮棒ってさ、なにができんの？」
「そうだな・・・物を動かしたり、操ったり・・・ぐらいだな。他に、試した覚えもねぇし。あ、でも、『博麗の巫女』の刀を受け止めたぞ」
「おぉ。凄い強度だ」
「・・・あのさ」
「ん？」

「呼び捨てで、いい・・・俺、なんか敬称をつけられるの、嫌いだからさ」
「そぉ？　じゃあ、そうさせてもらうよ、奏」
「！！」
っ！！
改めて呼び捨てにされるとなんか妖夢のときより気恥ずかしい・・・かも・・・。
「どうしたの？　顔赤いけど・・・？」
「そうか・・・？　気の所為じゃないか？」
「いやいやいや、絶対赤い。熱でもあんのかな？」
とか言いつつ、俺の額に触るな！！
「ないない。大丈夫だって。・・・っそれより！　何でこの『縦五街道』からなんだ？」
「えっとね・・・商業がさかん・・・って感じだからかな。その所為で、白玉楼の市街地監督・・・『警備員』みたいなのが多く配置されてるの。で、それに・・・ほら！　掘り出し物の楽器達をみるのが楽しいの何のって！」
『あ・・・リリカちゃん！』
『おーい！』
あれも『霊具』か・・・。
リリカには聞き取る力がないからな・・・。
「・・・聞こえてないぞ、お前ら」
『まじで？　君には聞こえるのに？』
「ああ、俺はちょっと特殊でな」
『はぁ・・・仕方ないな・・・まあ、いっか』
「納得したな」
と、俺が「霊具」と話していると、
「奏・・・？」
リリカがなにやら訝しんできた。
「独り言？　それとも・・・」

「『霊具』だ。ほら、あのチューバとピアノ。あと・・・そこのコントラバスも」
俺は、リリカに楽器達を指差して『霊具』を示した。
「ほんとに？　すっごーい」
「だろ？　一箇所に三つも『霊具』が置いてあるなんてちょっと凄いよな」
「じゃなくて、奏が。ほら、中々『霊具』の存在を見抜ける人って、いないからさ。それができる奏が、凄いな～って」
「・・・・・・・・・そ、そうか・・・？」
いかん。つい目をそらしてしまう。
何でだ・・・調子狂う・・・。おかしい、何かおかしい。
「また顔が赤いけど・・・大丈夫？」
「霊体だぞ、俺は。大丈夫だって」
「そぉ、ならいいけど」
なんでコイツの一挙一動に俺が反応する必要があるんだよ・・・
何かリリカといるときは・・・俺、ちょっと変かもな・・・何でだ・・・。
「ねえ、奏・・・っ、やっぱり呼び捨てって・・・なんか恥ずかしいなぁ・・・」
「・・・・・・何だ？」
「えっとね、今度はどこ行こうか？」
「ん・・・？　じゃあ、そこの街道行ってみるか？」
「『横四街道』・・・長屋がいっぱいある街道だね。なんていうか・・・人情の道？」
「何だそりゃ。でも、面白そうだな。行ってみようぜ」
「うんっ」
入ったはいい。
物凄い人の数だな、これは・・・。
密集って言葉がこれほど似合う場所もないと思う。
この多さは常識外だ。

と言ってもまあ、そんな過密なのは洗濯とかに使われる運河や井戸だけだがな。
「あら西藤さんこんにちは」
「ごきげんよう比良さん」
「調子はどうですか廣瀬さん」
「鰡冨さんそこ私の場所！」
いやいや、この生活空間は凄い。家庭感といい、なんとも言えず懐かしさを覚える。
「・・・・・大丈夫か？　こけるなよ」
「だいじょぶだいじょぶ。こけたりしないって」
「本当か？　足場、相当悪いぞ」
本当だぞ。俺はまあ、スニーカーだからいいが。
いつもの靴の白いの・・・メルランのじゃないかこれ？
いや、まあ違うだろうが。
とにかく、それなりに危ない足場なんだよ。俺は男だから大丈夫なんだって。
断じてリリカと手を繋ぎたいとかそんな不純な動機は一切ないっての！！
「心配ないって。平気平気・・・」
「っと、ごめんよ」
郵便配達・・・確か、飛脚とか言ったか・・・それが通り、リリカに当たった。
「うわわ・・・」
「ちょ、リリカ・・・」
がっ。
後ろにこけそうになったリリカの腕を掴んだ。
「な、大丈夫じゃないだろ？」
「い、今のは人に当たったからだもん。足場のせいじゃないもん」
俺は手を離し、再び歩き出した。
「慣れない靴履くから、バランス崩したんだよ」

「何でわかんの、そんなの」
「勘だ、何となくだ」
「・・・ふん」
「当たってなかったら謝る」
「・・・・・・当たってるけど、さ。・・・ねえ、奏」
「ん、何だ」
俯(うつむ)いてる・・・って言うかそっぽ向いてら、こいつ。
「その、だから、・・・靴が不安定だからさ、その・・・手を、繋いでてくれないかな・・・？」
「え？」
　耳を疑った。まず、そこからだ。
冗談にも聞こえねぇし、俺の頭が勝手に変な解釈してるだけかもしんねぇし・・・。
「いや、まあ、奏が嫌だって言うんならいいけどさ・・・」
はい、事実確定。
願ってもない幸運・・・いやいや、何でもない。
偶然かリリカの意思か・・・まあ、どうでもいいか。
手を繋げるんだし・・・いやいや何でもないって言ってるだろ。
「べっ・・・別に嫌じゃねぇし・・・いいぞ、手、繋ごうか」
「あ、ありがと・・・・・・」
ちょっと嬉しそうなのは何でだ？
しかし、気にしない。

それから、俺とリリカはいろんなとこを回った。
情報網の中心『縦弐街道』、魔術・霊術道場の栄える『縦仇街道』。
そうこうしているうちに、もう昼だ。
食堂がよく並ぶ『縦六・横参交差点』・・・その中の少し落ち着いた雰囲気のカフェで、リリカを休ませることにした。
　というか、リリカが『あの店に行きたい』って言い出したから行

くだけだがな・・・。
「いらっしゃいませ」
「マスター、お久しぶり～」
お？　顔見知りだったのか。だから入りたがったわけだな。
「・・・・・これはこれは、リリカ嬢。お久しぶりです、お元気そうで何より・・・おや、そちらの殿方は？」
「んっとね～、彼氏」
「ばっ・・・ちげーよ！　そんなんじゃねぇっての！」
びびった。まじで。からだの中を電撃が二、三発駆け抜けた感じ。
「はは、冗談冗談。えっとね、こちらは私の音楽友達、奏くん。ひょっとしたら、常連さんになるかもよ？」
「ほう？　だとしたら、大事に扱う必要がありますね」
「かもな。なんていうか、マスター・・・でいいか？」
「ええ、結構です」
「その・・・人当たりが良さそうだよな、マスターって」
「そう言っていただけて光栄です・・・カウンターへどうぞ」
促されたのでカウンターに座らないわけにもいかず。
「じゃあ・・・カフェオレを」
「いつものー！」
「畏まりました」

「・・・『いつもの』って・・・ミルクティー・・・？」
「ノンノン。『ロイヤルミルクティー』。甘いの」
「ホットミルクで抽出したミルクティーです。どうぞ、カフェオレでございます」
「あぁ・・・なるほどな、ありがと」
俺は、カフェオレを口につける。
・・・意外と苦い・・・？　コーヒーを飲む気にはなれなかったが・・・これは少し苦いか。
「砂糖を入れませんでしたので」

「・・・・・・読心術・・・」
「いえいえ、とんでもない。ほんのちょっと、表情が読めるだけですよ」
　いや、それでも十分凄いぞ・・・？
「リリカ、冥界に来たときは、必ずここに来てたりするのか？」
「ん～、どうだろう。多分、そうだと思うよ」
「『樂祭典例会』の時期になると毎年来てますよ」
確かそれが、リリカ達が出ているライブの名前。仰々しいが、これくらいごついほうがギャップがあって楽しいらしい。
「へぇ・・・」
「まあ、ここのロイヤルミルクティーは他と一線を画すからねぇ・・・毎年来ても飽きないんだな、これが」
「じゃあ・・・今度来たときにもらおうか」
「でも、あの味はリリカ嬢専用でして」
「いいよ、マスター。奏には作ってあげなよ、私の『いつもの』」
「まあ、あなたがそう言うならいいですが」
カフェオレの苦さにも少し慣れてきたところで。
「・・・そういえばここ、かなり食事処が密集してるのに、ぜんぜん客入りがねぇな」
「そういう雰囲気の店、と言うことです。和風・・・と言うか江戸時代風なこの街に、この店は似合わないんですよ」
「昭和レトロな雰囲気だもんな、ここは」
「私は好きだよ、こんな店」
「・・・ああ、俺もだ。気が合うな？」
リリカに、ちょっと挑発的に微笑んでみる。
「・・・そう、だね。・・・さて、そろそろ行こう？」
　リリカが、何か話を逸らそうとしている感じがしたのは俺だけだろうか。
俺はぐっ、とカフェオレを飲み干し、立ち上がる。
「さて・・・奏、こう言うときは・・・」

「俺のおごり、だろ？　一応、幾らか幽々子にもらってきている」
「おおっ、わかってんじゃん幽々子さん」
「どうも、ありがとうございました」

「って・・・どうしようか。見ごたえのあるのはそれなりに見たし・・・」
「えっと・・・じゃあ、白玉楼の桜でも見に行くか？　綺麗だしな」
「ん～、行こうかな。綺麗な桜は好きだし」
リリカを連れて、白玉楼へと向かう。

数十分間、空を飛んだ。
今考えると、それなりに遠いんだな・・・。
「おかえり～・・・って、あら、リリカちゃん」
「ども、幽々子さん」
「・・・・・奏くん？　まだ、お持ち帰りは早いわよ？」
「桜を見せに来ただけだ。他意はない」
「・・・嘘ついてる風には見えないなぁ・・・？　ま、いっか」
「・・・・・行くぞ、リリカ」
「っ、うん」
桜のたくさん咲いている場所へ、リリカの手を引いて。

「うっわぁー、本当に綺麗だねぇー！」
「だろ？　なんか、ここが少し懐かしく感じるんだ・・・なんでだろうな」
「わかる気がする。心なしか、ちょっと懐かしいかも」
ちょん、と指先が触れる。
だが、無視。おれは、手を繋ぎたいわけじゃない。
・・・っえ・・・？
手が・・・リリカの手が・・・俺の手、握ってる・・・？

「ほら、あっち、もっと綺麗・・・、行こう？」
今度は、手を引かれて、桜がさらに密集した場所へと向かう。

「わ、これ、四角くなってる！　何でかな、何でかな！」
「知らん。ただ、ここには巨大な霊気が眠ってて、それがこんな奇怪な状態を作ったのはわかる」
そこは、ちょうど5～6平方メートル程度の空間の外縁を、桜で四角く区切っているような場所だった。
「ねえ、奏・・・」
「ん？」

・・・・・・
「凄く・・・綺麗だね・・・ねえ奏」
「ん・・・中、凄く狭い・・・ぞ？」
「だよね・・・んっ」
「う、動くな、きつい」
「何とかして出ないと・・・！」
「だぁらきついっての！」
そ。俺は、愚かにもリリカの誘いに乗り、中に入り込んでしまった。
想像以上に狭いぞここ！
しかも俺は出口側にいて動けないから、なおさら。
いや、まじで！　ありえないキツさだって！
別に幸運な事故だなんて思ってねぇよ！
中が二畳あるかないか位の狭さだって！
別にリリカに何かしようとか考えてねぇっての！
「ちょっ、奏・・・足、邪魔」
「いや、知らねぇよ。俺はこれ以上重心を自分側に動かせねぇし」
「無理してみてよ」
「くそ・・・どうなっても知らねぇぞ」
と言って、木に背をつけた。

「もうちょっと背伸びして縮まって」
「む・・・無理・・・」
「ほらほら、早く」
こいつ、人の話し聞いてねぇだろ・・・ぜってー。
「ったく・・・しょうがねぇ・・・」
これをやったらどうなるか・・・俺は重々承知の上で、やってみた。
当然、重心が不安定になり、リリカに倒れることは間違いない。
はぁ?！　俺がそれやりたかったとでも言うわけか?！
馬鹿なこと言うなよ！　んなわけねぇだろうが！
「よ、っと・・・わわ?！」
「やっぱな・・・」
案の定、桜の木にリリカを押し付ける事になってしまった。
リリカの肩辺りで手をついたからこいつも動けねぇし、バランスわりぃ俺もうごけぇしよ。
だから嫌だって言ったんだよ・・・ったく。
「え・・・奏・・・?」
「ほらな。こうなることがわかってたんじゃねぇの?」
「どっ、どういう意味かな、それは?」
おどけても動揺してるのが見え見えなんだが・・・。
「そのままの意味だよ」
「ぅ・・・その、まま・・・?　こんなことに、なることが・・・
わかってたって言うの・・・?」
「少なくとも俺は」
「・・・じゃあ、奏は、こんなことしたかったの・・・?」
「・・・・・・?!　誤解だっ!!　そんなことは決して・・・!」
「じゃ、じゃあ・・・どうして、言わなかったの?」
「く・・・そ、それはだな・・・」
「やっぱり」
「いや、だから違うって!!」
「ほんと・・・?」

そこで俺の頬を撫でるな！！
理性が・・・ぶっとばねぇよ！　だからそれはねぇって！
「ねえ・・・？」
「そっ、それは・・・その・・・」
「私は・・・私は・・・こう、なるの、知ってて・・・やったんだけど、な・・・？」
なっ？！　やっぱりか！！
そんなこったろうと思ったぞ！！
「ねぇ・・・奏・・・」
「なっ・・・何だよ・・・？　変なこと言ったら、頭突きするぞ・・・？」
と言った直後、
ごんっ！
頭部に軽い衝撃。
「変なこと言った・・・こんな場面なのに」
「・・・すまん」
空気を読んでなかった・・・いや、ほんとに。
「こんな時・・・恋人同士だったら、何すると思う？」
――――――――――――――――！！
いきなり、何を言い出すんだこいつ？！
まじで変な事言い出したぞ！！　頭突きだ頭突き！　いや、しねぇけど。
いや、問題はそこじゃない。ＫＯＯＬになれ。・・・綴り違った、ＣＯＯＬだ。
いや、このリリカの、涼しそうな笑顔なのに何か艶かしい何かを感じる表情・・・？
頭おかしく・・・ならねぇよ！　ＫＯＯＬ・・・ＫＯＯＬだ！
まただ！！　ＣＯＯＬになれ！　俺！
「恋人出来た事ねぇし、お前も恋人じゃねぇし・・・何もしねぇよ」
ふぅ。なんとか普通に乗り切れた・・・。

「く・・・痛いトコロを。でもさ・・・もうしばらく、こうしてたい・・・かな・・・？」
いま、俺は本気でどうかしてる。
あのリリカの顔にあてられて、気が狂ってる。
そう言うことにしとく。こいつの所為ってことに。
「んっ・・・！」
「ふ・・・」
意識が戻ったら、何かもういろいろ真っ白？
意識以外、全部・・・いや、その意識さえも痺れが侵している。
俺は、気がつけば、自分から、リリカに・・・。
いや、俺も、なんかよくわからん。
ひょっとしたら、何か魔法にかかってたのかも知れない。
もしかしたらリリカが俺を引いたのかもしれない。
こいつの手と・・・俺の手・・・握ってたか・・・。
いや、片方だけ、だがな・・・？
もう片方・・・？　そんなこと気にする余裕なんてねぇって。
「っ、ふぁ・・・んぅ」
「ん・・・ふっ・・・」
自分でも何してるかわからない。
理解できたのは・・・こいつが・・・温かかった・・・って事くらいか・・・？
覚えてない。身体を包むこの不思議な感覚は、こいつのものだ、って事くらいしか・・・覚えてない。
「んん・・・」
「っん・・・ちゅ・・・」
「っふ・・・ぁ」
何があったか・・・記憶から消えた・・・事にした。
夜は更けたのに・・・数時間前と変わらず気分は膠着(こうちゃく)状態だ。

リリカにキスしたまではいい。いや、よくねぇえけど。
頭真っ白になって・・・どうでもよくなっていって・・・
その先は想像すら・・・うあああああ！！　思い出すのも嫌だぁぁぁぁぁ！
「・・・き、きまず・・・・」
「だよな・・・」
「私達の事言ってるんだけど・・・・」
「俺もだ・・・」
「どうして話してるのかな・・・？」
「・・・俺らって、なんていう関係なんだろうな・・・？」
「友達・・・だよね」
「じゃあなんで・・・あんなこと？」
「どうしてだろう・・・奏は、私の事好き？」
「・・・わからん・・・嫌いではないのは確かだ。・・・リリカは？　俺の事、好きか？」
「私も、そう。・・・わかんない。何で、あんなとこに入ったのかも・・・」
「俺の所為だ。俺が、やめておけばよかったんだよ・・・お前一人で入って、そのあと俺一人で入ればよかったんだ」
「そんなこと、ない・・・けど・・・私の所為だって」
「・・・・・・、なんで、俺、あんなこと・・・・・・っ」
「思い出す？」
「今は、嫌だ」
「私も」
「だよな。・・・・・・なぁ。今から、夜景が綺麗な場所・・・行かねぇか？」
「え・・・？　まだ、どっか行くの？」
「い、いや、行きたくなかったら・・・いいが・・・」
「う、ううん。ただ、まだ、一緒にいてもいいのかな・・・って」
「それは・・・俺も思った。でもさ、俺は・・・もうちょっとでも、

お前といたい・・・って」
　それは、小町のときより・・・何倍も・・・強くて、堅くて。
ここで・・・こんなところで、こいつと別れたくない。
「だから、こんな状況でこんなこと切り出すんだぞ・・・？」
「かっ・・・奏・・・？！」
「嫌いじゃ、ねぇ。お前のこと」
精一杯の感情・・・だろうな。俺の、全力といったところ・・・。
「ほら。市街地からちょっと離れたところにある、川なんだが・・・」
「うん。じゃあ、いこっか」
ちょっと嬉しそうなリリカの表情・・・。
何かわからないが俺も少し幸せな気分になった。

あの時妖夢に連れて行ってもらったところ・・・この時間帯なら、妖夢はいねぇだろ。
「な？　ここ・・・ダチに教えてもらったんだ。『映る月が綺麗だ』って。・・・俺は、この、水そのものに乗ってくる・・・せせらぎを通して伝わる・・・音楽が好きなんだ」
いや、クサイ事言ってる訳じゃねぇ。才能だ、才能。音楽やる奴の。
『自然の声が聞こえた』
って、俺は普通に周りに音楽があふれている事を知ってる。冗談抜きで、そういうのがリズムとかビートとか刻んでるんだ・・・そう、聞こえるんだよ。
「・・・・・・ん。ちゃんと伝わってくる。・・・この拍子・・・ワルツ・・・？」
「ああ。お前にも聞こえるだろ？　すげぇんだ。盛り上がるところが一つもないのに、聞き入っちまう・・・そんなワルツなんだ、これ」
「操れる？」
「具現化、位ならできるぞ」

「じゃあ、私も・・・」
リリカがパチンと指を鳴らすと、羽のついたキーボードが。
俺は、指揮棒を振り上げ、リズムをとり始めた。
それにあわせ、リリカが川の水が奏でる旋律を音にしていく。
水は変わることなく、止まる事なく、絶えることもなく流れ、俺たちにメロディを紡がせる。
この空間を満たす、この曲のイメージ・・・水色。
どこまでも透き通る川のせせらぎのような・・・優しく、哀しく、儚く、全てを洗い流す清らかさを、俺たちは綴り続けた。
まるで・・・まるで、俺たちが・・・清浄さを求めるかのように。
今だけはそれでいい・・・音楽だけが、俺たちの今の関係の免罪符だ。

あのあと、俺はリリカを送った。
市街地だったからな・・・。それなりに遠かった。
「・・・・・・じゃあ、俺はこれで」
「うん・・・・・・ねえ」
「・・・なんだ」
「また・・・また、会えるよね？」
「・・・・・・どうだろうな」
「じゃあ、明日は？」
・・・・・・妖夢との予定があるが・・・なんとか話をつけて、断ろうか。
「多分、大丈夫だ」
「ほんと？！」
「まあな。あと、どれくらいいるんだ？」
「えっとね・・・あと、四日くらいかな・・・」
「え・・・短いな、意外と」

「そうかな？　私は・・・そうでもないと思うけど」
「・・・・・・・」
「・・・・・・・」
　会話が途絶える。
何か・・・向かい合ったまま黙ってるのは・・・気まずい・・・？
「じゃ、じゃあ俺は帰る」
「っあ、う、うん。また明日ね」
風を身に纏い、空へと飛びたつ。
振り返るわけねぇだろ、あんなことがあった後だぞ。

白玉楼・・・廊下。
誰とも会いたくない。
特に妖夢とは。
何でかって？　決まってんだろ、何があったか聞かれる。
その点では幽々子もだな。
ただ、幽々子にはまだ話してもいい。
妖夢には・・・絶対話せねぇよ・・・。
『もっと、奏のこと、知りたい』
あの発言の意味。
わかってるから、話せない。
そうさ。俺は、あいつの事・・・特別視出来ねぇ。

だからこそ。俺は・・・あいつに話せない・・・。
辛くはない。気遣ってるだけだからな。
「奏！」
「・・・・・・何だ？」
「遅かったわね！」
「・・・いろいろ行ったからな」
「どこ行ってたの？」
だから嫌なんだ、妖夢とは会いたくなかったんだ・・・！
「冥界見物だ」
「こんな遅くまで？」
「何だよ・・・俺が遅いと、何か都合が悪いのかよ？」
「そっ、そう言うわけじゃないけど・・・」
「別に俺が消滅してもお前は困らねぇだろ」
「嫌だよ・・・消えられたりしたら、私・・・」
「それにさ、お前、昨日から俺に対して、態度が過ぎるんじゃないか？」
「え？　そんなこと、ないと思うけど・・・」
「あって数日も経ってない俺に、どうしてそんなことが出来るんだ？」
「・・・・・・貴方は」
「？」
「貴方は、私がずっと隠ししてきた『私』を、一回戦ったくらいで見抜いた・・・貴方なら、本当の『私』を、受け入れてくれる・・・認めてくれる、って、そう思ったから・・・私、それから、貴方のことばかり考えてしまって・・・」
「・・・・・・」
何だこいつ（妖夢に三回目）。
いや、俺はこいつにアドバイスはしたぞ？
本質を見抜いたりはしてねぇって・・・。
「違うんだよ。俺は、お前の悲壮感漂う状態を、何とかしたかった

だけなんだって。勘違いすんな、俺はお前の言うほど凄くもねぇし、お前の本質なんて見抜いてねぇよ」
「『ずっと・・・前だけを見て、余裕を知らなかった』っていうのが・・・私、知ってて、わかってて・・・ずっと辛かったのに・・・っ、貴方が言うまで、我慢してたって・・・」
「そうじゃなくなったんだろ？　幽々子は、ちゃんと受け入れてくれるぞ」
「奏じゃないと駄目なの！」
「・・・・・・何でだ？　俺が、お前に振り向くわけないって、わかってんだろ？」
「っ・・・」
「俺は誰かを好きになるなんて、考えるほうが馬鹿らしい」
なぜかこいつに辛くあたっちまう・・・どうしてなんだ。
こいつのこと、嫌いじゃねぇはずなのに・・・。
・・・・・・嫌いじゃない？　誰かに言ったよな、これ。
えっと・・・・・・あ、リリカだ。
リリカに、嫌いじゃないって・・・・・・・・
だったら、こいつとリリカは、同じ程度・・・・・・？
いや、違う。
何が？
リリカのほうが・・・好き、なのか・・・？
少なくとも妖夢よりは・・・？
「・・・・・すまん、明日は付き合えなくなった・・・いや、付き合う気が無くなった。・・・勝手なのはわかってるんだ。ただ、このままの気分でお前に付き合っても・・・」
「わかった。・・・じゃあ、私はもう、寝るね」
「おう。・・・また・・・明日な」
　この場をなんとか切り抜けて、俺は寝室に行った。
気まずいのはわかってんだよ。そうさ、ひょっとしたら明日から妖夢は口聞いてくんねぇかも知れないしな。だったらどうしようか・・

・。
いっそのことプリズムリバーのサポートメンバーになろうか。
・・・今、少しでも寂しいと思ってしまった。何なんだ？　俺・・・
。

そんな事を考えて、いつの間にか寝ていた。

同時刻、プリズムリバーの宿泊先にて。
「はぁ・・・」
リリカが、指で唇をなぞる。
そして、陰鬱とも幸福ともとれる溜息をついた。
「リーリカっ。どうしたの、そんな浮かない顔して」

「あ・・・ルナ姉」
黒い服・・・といってもいつもの服ではなく、パジャマなのだが・・・のルナサが現れた。
「今日の仕事休んで、一日奏くんとどっかいってたんだっけ？」
「ぅ、うん・・・」
「デート？」
「わかんない。そうかもしれない。そうじゃないかもしれない」
「リリカにしては曖昧な答えだねぇ。あの子に恋でもした？　やっぱり」
姉妹間になると、ルナサは途端に饒舌になる。
「そっ、そんなこと無いって！　それにやっぱりって何？！」
「強く否定するあたりがまた怪しいねぇ・・・」
「だから違うって！！」
「隠さなくてもいいから。冷やかしたりもしないし、過度の干渉もしない。ただ、ここにはそういられないでしょ？　ちゃんと、自分の気持ちに答えを出しとかないと、後悔することになるよ」
それを告げられて、リリカは俯いた。
「わからない・・・私、嫌いじゃない・・・けど、好きかどうか・・・」
「それでいい。ちょっとでも時間があるんだから、迷えるうちは迷えばいい。ただ、時が来るまでには答えを出しておかないと、ね」
「・・・うん、そうだよね・・・」
「・・・・・・ところで」
「何？」
「メルのワンピース勝手に着ていったでしょ」
「ちゃんと謝ったもん」
「そ？　だったら、まあいいけどさ」

ａｒｅｎｅ：ｓｉｘ　離別の円舞曲～Ｃａｒｌｓｂａｄ．（後書き）

この話、実はそのままあげようか書き換えようか迷ったんですけどね。
結局ほとんど書き換えずにあげてしまいました。

arene：sept　月に輝くこの想い～Quasi　una　Fantasia

タイトルの日本語タイトルと英語タイトルが関係ないと思うでしょう・・・？　実は違うのです・・・。
これはベートーヴェンのピアノソナタ１４番『月光ソナタ』の正式サブタイトル『幻想曲風に』の仏訳。
それではまた。

あ、文字数が異常でごめんなさい。

その日はえらく目覚めがよかった。
部屋の時計を見れば、時間は巳の二つ（十一時頃）。
うん、納得。昨日寝たのが丑の二つ（三時頃）だから・・・八時間寝たことになるな。
「えらく寝られたな、俺・・・」
食欲もない、取り敢えず昨日の残りの金があったから市街地にでも行こうか・・・。
よし、マスターにリリカの『いつもの』を入れてもらおう。
リリカ・・・か・・・行かなくちゃな。約束したし。
でも気まずいな・・・多分行かないともっと気まずくなるしな・・・。
・・・・・・無限思考はやめよう。
取り敢えず、市街地のあのカフェに向かう。

昨日、リリカと入って・・・ごにょごにょ。
桜の木が密集してるあたりを通る。
何だか違和感を覚える。
「・・・・・・あの木・・・？」
木がひときわくっついてたところには、一本の大木が。
違和感の正体は・・・こいつか。
「やっふ～。あの木はね、大きさだけなら西行妖を上回る綺麗な桜なのよ～」
「幽々子、あの木は確か、十二本くらいの木が重なってるんじゃなかったのか？」

「ん？　ああ、化かされたんじゃない？　この木、たまにこの木の妖術で姿が変わったように見えるのよ。たくさんの木が密集してる・・・か。面白い幻覚ね・・・あ、あと『人を惑わして奇行に走らせる』事もしばしばあるのよ。ほら、あの木の洞（うろ）。あそこから、妖気が湧いてるの」
「ほう・・・？」
「ちょっとクラクラ～っとなったあと、何考えてるかわかんなくなっちゃうわけよ。そうねぇ・・・・・・ちょうど、今の私みたいに？」
がっ。
幽々子が俺を木に押し付ける。それもあの大木に。
リリカを押し付けたときと同じように。
やっぱしな、こいつは近いうちに封印だな。
と、そんな事を考える前に・・・。
「悪い冗談を」
「冗談じゃないわよぉ～」
さぁて、顔を近づけてきやがった。何をするやら・・・
ほらよ、頭突きだっ！
「らぁ！」
「あで」
「目が覚めたか？」
「うぅぅん・・・やっぱりこんなんじゃ無理かぁ・・・」
幽々子が手をかざすと、俺は何かに縛られた。と言うより、金縛りにされた。
「な・・・何のつもりだ？」
「言ったでしょ？　何考えてるかわかんない、って」
ちっ。一回そうなった俺は、免疫あるってことか・・・。
「はぁむ」
「っ・・・！」
耳？！　妖夢と勘違いしてね？！

「なっ？！　幽々子、俺が誰かわかるか？！」
「奏くん～」
「俺は耳が弱点じゃねぇって！」
「じゃあ、他のところを虐めて欲しいのかなぁ～？」
「ちげーよ馬鹿！　放せっての！」
「ん～、駄目」
くそ、妖夢にも頼れねぇしな・・・。どうするか。
指揮棒は・・・取れん。即ち・・・感覚だけで気を操作しなくちゃいけないわけだ。
「チッ・・・」
「んん？　諦めた？」
「ふん、好きにしとけ」
「っふふ・・・じゃあ、好きにしようかな～」
っと、まず、幽々子の周囲にあるこの妖気を・・・俺の指向性霊術で破壊・・・！
あれ？　できねぇ・・・？
「じゃぁ、そうだねぇ～。首から？」
くすぐったいだが気にしない。
じゃあ、こいつを・・・っ仕方ない、『アンデッドは火に弱い』！
「地獄の火焔を、荒振る猛火を、混沌の儀を、我が元に！　・・・獄炎！」
地面から、炎が噴き出す。
黒い、そして白い、炎が。
「呪われし妖樹を・・・闇の懐へと、葬り去れ！」
木を、炎が覆い、焦がし、溶かし、燃やしていく。
幽々子を木から離し、殴って気絶させる。
「チッ・・・仕方ねぇ。そろそろ、妖夢が来る頃だな・・・俺は去るか」
地面を蹴り、空を舞い、市街地へと向かった。
あの炎は、俺の指示が完了する・・・即ち、あの木を破片も無く燃

やし尽くすと消滅するようになっている。
放置していても、問題は無いはずだ。

市街地の、昨日リリカと行ったカフェ。
扉を開くと、カランコロンと来訪者を継げる鈴が音を立てる。
「いらっしゃいませ」
「・・・あ、奏」
「リリカ？」
「奏さん、どうも」
リリカがいた。
何だか、ちょっと安堵した気分になった。
偶然、でいいよな・・・？
「えっと・・・よう、リリカ」
「う・・・うん、おはよ」
「さて？　奏さんは何を？」
「そうだな・・・昨日のはちょっと苦かったからなぁ・・・はは、俺、苦いの駄目なのかも」
「じゃあ、奏にも『いつもの』をお願い」
「畏まりました」
「・・・・・・ほらほら、奏もここ座って」
リリカが、自分の隣を指して促す。
「・・・・・・ああ、そうだな」
そして俺は、それに従った。
「どうぞ」
「わ、早いな」
「先程、ミルクを温めてありましたので。リリカ嬢が来てすぐ、奏さんがいらっしゃりました」
「あぁ、なるほどな・・・」
猫舌、と言うわけでもないが、これはなかなか・・・熱い。
「甘い？」

「熱すぎてわからん」
「だよねー。　リリカさんはちょっと冷ましてから飲む事をお勧めするよっ」
「・・・そうか？　じゃあそうする」
マグから口を離し、リリカに何を離せば良いか少し考えた。
えっと・・・あ、そうだ。昨日のは本気で事故だって言わないとな・・・。
「あの、さ。リリカ。昨日のあれだけどさ」
「・・・・・・・・っ、うん」
言葉に詰まったあたり、かなり気にしてるみたいだ。
本気で悪い事したな・・・って思った。
「あの樹の塊、ほんとは一つのでかい樹で、人を惑わす力があったんだと。で、なんて言うか・・・その、あれはただの事故だったっつうか・・・あーもう。これだからボキャ貧は・・・」
「って言うと・・・私たちは、その樹に惑わされてた・・・？」
「まあ、そう言うこった。だから、さ。そんなに、落ち込まなくても・・・って？」
俯いてちょっと残念そうな顔してんの、リリカの奴。
「奏は、あれ・・・私があの樹に惑わされただけだって思った？」
「違うのか？」
「ほんとは、あの時点なら止められたんだ」
「え・・・・・・っ、やっぱり、お前・・・」
「私・・・私、自分でもおかしいって思うよ。でも・・・あの時、奏に・・・もっと近付きたい、って・・・そんなこと・・・・・・何言ってるんだろ、私・・・」
急に、何かよくわからない感情が胸を満たす。
誰といたときも感じなかった・・・変な感触だ。
こいつが変な事言ってるのはわかってる。でも、何処か理解できる。
まるで、あの時俺もそうだったみたいな。
そんなわけねぇのに。あの時は、二人ともあの樹に惑わされてただ

けなんだ。
・・・・・・・・・・・・・・。
でも・・・・・・今になって思った。多分・・・半分、自分の意思も混ざってたんだ、って。
だから俺は・・・わかってて、リリカを木（正確には木の洞）に押し付けたんだ。
理由はわからんが、それを俺が多少なりとも望んだから・・・・・・・・。
「・・・わからんでもない」
「えっ？　どういう・・・こと？」
「だから、俺も多分そうだった、ってことだよ。・・・・・・言わせんな。マスターがいる」
「いえいえ、お構いなく。私は雑談なんかは割と忘れる質なんで」
「・・・・・・・そうか？　なら、構わねぇが・・・」
「・・・・・・・・・・ねえ奏」
「んく・・・何だ？」
冷めてきたミルクティーを飲み始めた俺に、リリカが話題を振ってきた。
「どんな仕事につくか・・・決まった？」
「んと・・・まだだ。正直、音楽関係意外に就ける気しなくなってきた」
「はは、私達が音楽を教えちゃったからかな？」
「・・・八割は。でもまあ、この指揮棒のおかげもあるかな」
「名前とかつけたら？」
冗談交じりにリリカが言う。
「ははっ、そりゃ良いな」
同じように返してやる。
「・・・ねえ、本気でうちのサポートメンバーにならない？」
「え？　お前らなら、メンバーパートも足りてるし、俺がいなくてもいいだろ？」

「えぇ～・・・それは・・・なんとなくだよぉ～」
「何となく・・・って、お前・・・」
「実力は見たし。十分ステージでやっても問題ないよ」
「まじで？　何か照れるな」
ちょっと恥ずかしくなって照れ笑いをしてしまう。
「ほら、あれの原動力が魔法だから・・・えっとね、そのシステムを組み込んだギターとかドラムスティックとかなら、バンドでもいけるかな～、って」
「・・・・・・なるほど。そんな使い道、思いつかなかったな」
「でしょ。リリカ様は天才だからね～、えっへん！」
胸を反らせて威張るリリカ。
「ああ・・・そうだな」
「・・・・・・・・奏、ちょっと出よ？」
「・・・おう。マスター、ここに置いとくぞ？」
硬貨を数枚、カウンターに置く。
「はい。それでは、また」
そして、リリカについて外に出た。

「なんか・・・ちょっと空元気な感じがするよ、奏」
しばらく歩くと、リリカは俺に歩調を合せてきた。
「・・・・・・そう、か？　そんなこと・・・」
「いやいや、何か無理してる感じ。・・・やましい隠し事とか・・・してない？」
「・・・・・・べっ、別にねぇし・・・それに、お前には隠してても・・・良いだろ？」
「え？　隠し事してていいの？　私にぃ？」
「・・・お前だって、あんだろ？　俺に、隠し事くらい、さ。ほら、俺らって・・・関係薄いしさ・・・」
「うぅ・・・やっぱしぃ・・・」
「・・・誤解すんなよ。俺は、お前と会って一週間も経ってねぇぞ」

「・・・・・・確かに。何で毎日会ってんだろうね」
「・・・・・むむ。そうだよな・・・」
少し考え込む。
何でだろう。俺は、こいつのこと、嫌いじゃねぇ。でも、どうして・・・あの時、リリカは俺をあんなデートまがいなものに連れていったんだろう。確かに、ちょっと嬉しかったかもしれないけど・・・でも、違和感なんて少しも感じなかったのは・・・何でだろう・・・。
「やっぱ・・・これって・・・・・・・・・ぃなのかな・・・」
「え？」
「っいや、なんでもないって」
「そ、そうか・・・？」
「何でもないの！」
「お前が言うならいいが・・・」
・・・・・・気がつけば俺らは・・・人気（ひとけ）などあるはずもない場所に来ている。
「人の少ないところを通ったら・・・こうなっちゃった・・・じゃ、いいわけにならないよねぇ・・・」
「ならん」
「・・・・・・さて？　何する？」
「戻るという選択肢は？」
「ないよ」
「・・・・・・じゃあ、俺だけ帰る」
「それもなし」
「進む」
「・・・・・・やっぱり駄目」
「・・・・・・じゃあ、どうしろと」
「むむぅ・・・そうだねぇ。また、キスする？」
「頭突きされたいか」
「チッ・・・じゃーあ、こうしたらどうかなぁ？」

ガッ・・・
またか、本日二度目。
今度はリリカに押し付けられた。
俺には女難の運命でもあるのか？　ったく。
「抵抗したらぁ・・・」
「わぁった、しねぇよ」
「よろしい」
「・・・・・・じゃあ、私にどんな隠し事してるのか、教えて？」
・・・まじでか。
「すっごく恥ずかしいぞ。お前が」
「いいの。何だか聞きたい気分なんだから」
「はぁ・・・実は、な・・・今日、ほんとは妖夢につきあって冥界見物行く予定だったんだよ。話すとやたら長いから割愛するが、俺は・・・お前のこと考えた時の『嫌いじゃない』と妖夢のこと考えた時の『嫌いじゃない』が、違うな・・・って、そんなこと考えてたんだよ・・・そしたら、お前の顔見るのが・・・急に恥ずかしくなって・・・さ・・・なんつぅか・・・その・・・」
「わかるわかる・・・そんなことってあるよねー」
あ・・・簡単に理解してくれたぞ。やったコレ。なんとか切り抜けられそうだ。
「だよな。あるよな」
「でもさぁ」
ぐっ、と顔を近づけて、今にもぶつかりそうな寸前。
顔の少し下、目を下ろせばすぐのところ・・・紅潮したリリカが。
まるで「私も恥ずかしいんだから」と公言しているような表情。
目が離せなくて、顔が熱くなる。
離れたい。いいや、離れたくない。
突き飛ばせばいい。そんなことできない。
葛藤している二人の自分。
今までの自分と、今の自分。

すぐに突き飛ばして離れろ。このままでいい。
リリカの目から逃げられない。
不思議と怖くはない。いや、怖いほうが不思議か。
「それって・・・私のこと・・・・・・って、誤解してもいいのかな・・・・・？」
「お前はどうなんだよ・・・？」
「わっ、私は・・・・・・わかんないよ。恋なんて・・・・・・したことないし」
「俺もそうだぞ・・・・・・わかんねぇよな・・・好き、なんて感情」
「わかんないよねぇ・・・・・・」
「でもさぁ・・・こうしてたら、お前を、『ぎゅ』ってしたくなるんだが」
「・・・・・・」
ほら、俺がこんな事言ったから・・・俯いたじゃねぇか。
ちょっと残念だ。こいつの照れた顔・・・見てぇなぁ・・・。
いま自分が何言ってんのかわかんねぇ。ただ、こうしたいっていうのを、正直にリリカに話してる感じ。
あの樹の妖気がまだ抜けてねぇのかな？
まあいいや。俺、『ぎゅ』ってしたいって思ってるんだから。
「しても、いいか？　『ぎゅ』って」
「・・・・・・・・・」
こくん。
僅かに、首が動く。
おかしいよな、俺も、リリカも。
始めはステージの上と下、見せる側と見る側だったのに・・・今じゃ茶を飲み交わす仲だ。おまけに、こんなことまで・・・・・・なんでだろうな？　まあ、あの樹が少しは関わってるのは確実だがな。
俯いたままだったリリカが、顔を上げる。
「・・・・・・」

いかん・・・言葉で表現できない・・・可愛いとか、切なそうとか、そんなチャチなもんじゃねぇ・・・もっと物凄いものの片鱗を味わったぜ・・・。
手が動く。
腕を、リリカの背中に回す。
「ぁ・・・・・・っ」
「・・・落ち着く」
「・・・・・そう？」
「ああ。なんて言うか・・・お前が、ここにいる・・・って感じが、落ち着く」
「・・・・・・・・」
あー・・・まただ。
俯きやがった。
・・・・・頭に、手を乗せてみた。
「わっかんねぇよな・・・『好き』なんて感情・・・」
「私は・・・・・・うん、私も。よくわかんない」
と言うと、リリカはその手を俺の背に回す。
「・・・ただ、『こうしてたい』って感情が『好き』なんだったら・・・私は、奏のこと・・・」
「・・・・・なんか、衝動的に、お前にこうしたくなった。もし・・・これが『好き』なんだったら・・・さ」
「うん・・・そうだよね」
「何でだろうな。まだ出会って全然経ってねぇのにさ、こんな気持ちをお前に抱けるんだろうな」
「わかんないよ。私もそうなんだから。ほんと、どうしてなのかな・・・」
半分涙声なのがよくわかる。俺は・・・どうしていい？
わかんねぇから取り敢えずちょっと強く抱いてみる。
「大丈夫か？」
「・・・何が？」

「いや、お前が・・・ちょっと涙声だったからさ。その・・・傷つけたんじゃねぇかなって」
「・・・・・・ううん。そんなことないよ。むしろ・・・」
「逆、か？」
「・・・わかってんじゃん」
リリカのほうも、腕の力を強くしてきた。
「・・・・・・多分、私、これが『好き』だったらいいな、って思ってる」
「俺も多分そうだ。この感情が・・・『好き』だったらいいなんて思った。・・・おかしいか？」
「だったら、二人ともおかしいね」
「・・・・・・ああ、多分、二人ともおかしいんだ」
「・・・・・・でもさ、一人なら『おかしい』でも、二人なら・・・分かち合える人がいるから、おかしくないんじゃないかな？」
「・・・・・・ふん。嬉しいこと言ってくれるじゃん」
「・・・奏がいたからこんなことわかったんだからね」
くぅぅぅぅ！
何か物凄く胸がいっぱいに・・・っ！
と、その直後。
俺の身体からリリカが離れる。
即ち、突き飛ばされたわけだ。
「っ、とと」
バランスを崩しそうになったが、この程度では・・・倒れんぞ。
「んっ」
リリカが肩を掴んで引き寄せて、俺にキスをした。
「――――――――――？！」
一瞬、頭が真っ白になった。
しかし、それは所詮、一瞬だった。
俺はつき飛ばされ、尻餅をつく。
「いつつ・・・」

若干離れたところから、これでもかというほどリリカは明るく微笑んでいた。
「じゃっ、またね！」
「ちょ、待てって・・・・・・！」
と言う間に、リリカは去って行った。
「・・・・・・何だったんだ」

若干の違和感を残しつつ、白玉楼に帰ってきた。
庭のあの大樹の様子見に向かう。
「えっと・・・まだ燃えてるのか？！」
「あ、奏くん」
幽々子が、後ろから現れる。
「あれ、燃え移らないのはいいけど消えもしないんだよね・・・どうしよっか？」
「そうだな・・・・・・多分消したらまたあの妖気に惑わされる奴が出てくるしな・・・」
「あ、そう言えば・・・朝の件、ありがと。おかげで奇行に走らなくて済んだよ」
「俺もお前にいろいろされるのはごめんだしな・・・・・・そうだ！」
「ん？」
「ちょっと待ってろよ・・・『退け、火焔！』」
黒い炎は地面に吸い込まれるように消えた。
そして残っていた樹は、まるで燃えた後一つなかった。
「やっぱしな・・・『光よ・・・清め、晴らし、明るく照らせ・・・セントライトニング！』」
今度は、地面から光が上がる。
これで妖気の根元を絶って、この樹を無害にしようってわけだ。
「・・・・・・よし、これで少なくとも一週間は大丈夫だな」
「おおぅ、さっすが奏くん、やるじゃん」

「俺も散々だったからな、こいつの所為で」
でも、こいつのおかげで、リリカと少し通じ合えた気がする。
それでも後悔とか・・・多少しかしてねぇし。

その日の夜、一人寝室で物思いに耽っていた。
「はぁ・・・・・・・・・・」
わかんねぇな・・・。
リリカの傍にはいたいんだが・・・この気持ちが『好き』なのか・・・。
わからねぇ・・・だから、踏み出すのに抵抗がある。
変なところだけはやたらと積極的になれるんだが。
おかしいよな。俺って。
自分の感情一つ理解できねぇ、器の小さい人間なのか・・・。
俺は最低だよ。散々、リリカと一緒にいてこの気持ちが一体何なのかわかんねぇんだ。
・・・・・小町なら、教えてくれるのか？
いや、あいつは無理だな。こう言うのには疎そう・・・でも・・・
あいつは、俺のこと・・・。
リリカの事を考えてるときと、小町の事を考えているときの感覚・・・凄く、似てるんだが・・・何か違う。何か暖かい気持ちになるのはどっちもそうなんだ。でも・・・リリカは、何か高揚感と言うか、胸を締め付けられるというか・・・わかんねぇ。どうしようもなく、何かが熱くなるんだ。
・・・・・寝るか。もう、考えるのも疲れたし。

近時刻、プリズムリバーの宿泊先。
「っくぅ～、やっと終わった～！」
「おっつ～！」
「今日も一日、がんばっちゃったね！」

樂祭典例会、四日目の司会進行の後、隠れ家たるそこに戻ってきた三人は、それぞれの部屋に入った。
　あの大きめの部屋は全てにおいてカモフラージュ。
まずクローゼットはルナサの部屋の扉、そしてバスルームの扉はリリカの部屋（別にバスルームはある）、二つある鏡のうち一つはメルランの部屋。
「・・・・・・リリカ、着替えたら私の部屋においで？」
「あ・・・うん、わかったルナ姉」
そして数分の後。
ルナサの部屋に、ノック。
「私だけど」
「どぞー」
リリカは、その開けづらいクローゼットの扉を開き、ルナサの部屋に入った。
「ねえ、何の用？」
「ん～、なんか・・・リリカがすっごく悩み詰めた顔してたからさ」
「え・・・私、仕事中にそんな顔してた？」
「いやいや。業界人たるもの、そんなことはしてないよ。仕事前に、ちょっとそんな風だったから」
「うう・・・隠せないなぁ、ルナ姉には」
「そりゃあ、お姉さんだしね。・・・どうしても駄目なら、頼るのも手、だよ？」
「んとね・・・。私、奏と・・・一緒にいたいの。すごく、すごく強い気持ちだって、理解してる。でも、それを『好き』っていうのか、わからないの」
むむ、とルナサは傾げた。
「そうだね・・・じゃあ、奏くんはリリカと一緒にいたいって思ってるか、わかる？」
「え・・・うん。奏もそうだって、今日・・・聞いた」
「聞いた、って・・・それはもう確信犯・・・！」

「え？」
「いや、こっちの話・・・で、それだったらさ。もう、その気持ちが恋だとか、全く関係ないじゃん？」
「そんなことないって！　だって・・・だって、好きじゃなかったら、私、奏を・・・裏切ることに・・・」
「ならないって。そもそも、奏くんだってリリカの事好きかわかんないし？」
「うぅ・・・確かに・・・っ」
「ほら、それ聞いてちょっと変な気分になったでしょ」
「・・・・・・」
「ふふ、それでいい。・・・・・・一緒にいたい、ってお互いがそう思ってるんだったら、好きとかそんなのはどうでもいい。そうしたいんでしょ？　だったら、そうすればいいと思うよ？」
「っ違うの！　そんな、簡単なものじゃないの！　そうしたいけど、出来ないの！」
「簡単だよ。でも、どうしてもきっかけが欲しいんなら・・・『好きだから一緒にいたい』・・・そう考えてみたらどう？」
「え・・・？　好き、だから？」
「そ。『一緒にいたい＝好き』じゃなくて、一緒にいたいのは、奏くんのことが好きだから、って考えたら・・・踏み出せるんじゃないかな？」
「好きだから・・・好きだから、奏といたい・・・か。うん、何かちょっと勇気が湧いてきた」
「ね？　ルナ姉に任せれば、こんなことも解決。ほら、明日に備えて、今日は寝ちゃいなよ」
「うん」
また小さく、事は前へと歩みを進めた。

ａｒｅｎｅ：ｈｕｉｔ　悲愴の鐘～Ｌａ　Ｃａｍｐａｎｅｌｌａ．（前書き）

えっと・・・鐘なんて出てこないのは気にしない（何
単にこの曲が終盤のイメージと重なったから、使わせていただいただけです。ググったら聞けると思います。
あ、『ラ・カンパネラ』が一般的な読みかたですが、正式な発音は『ラ・カンパネッラ』だそうです。
それでは。

ａｒｅｎｅ：ｈｕｉｔ　悲愴の鐘～Ｌａ　Ｃａｍｐａｎｅｌｌａ．

「む・・・・・・」
冥界の市街地にて、俺はこの前妖夢との約束をすっぽかした詫びに（なるかはわからんが）何かプレゼントでも買ってやろうかと雑貨屋に足を運んだ。
やっぱり、女の趣味は・・・わからん。いや、わかったほうが怖い。
このネックレスか・・・それともあの指輪とか・・・でも質素そうなあいつだからこの髪飾りもどうだろう・・・？
あーもう、やっぱしわからん。周囲に相談できる相手がいないと、すごく困る。

「あ・・・あれは、奏くん？　どうして・・・女の子モノの雑貨屋に・・・？」

ふと背後に感じたことのある気配。
「ん？」
振り向いてみると、誰かに魔法の類で連絡している、黒い服の・・・ルナサ？！　いや、何であいつが・・・！
人ごみにまぎれてて何となくわかりづらいが、あいつは・・・確かにルナサだ。
やばい・・・・・・リリカに連絡とかされようものなら・・・・・・。
何でかはわからんが物凄くそれは嫌だ。
・・・・・・止めようにも、さっき連絡を終えて近くの店に入って行きやがった。
これは相当、危険かもな・・・。

「あ、リリカ。ほら、あれ見てよ」
「か、奏？　何で、女の子モノの雑貨屋に・・・？」
「わかんないよね～、くすくす」
「誰かのプレゼントかなぁ・・・」
「ひょっとしたら、リリカのかもよ？」
「ま、まっさかぁ～！」
「いやいや、どうかなぁ？　リリカ、ちょっと行ってみなよ」
「うぇ～？！　ルナ姉行ってきてよ～」
「まあまあ、こういうのは直接聞くから面白いんだって」
「うぅ・・・わかったよぉ・・・」

・・・すっごく迷うんだが。どうすればいいんだろう？
この髪飾りか・・・いや、あいつだったらこの指輪とか好きそうだな・・・
「奏っ」
「・・・予想通りだ」
「えぇ～、つまんないの～」
リリカが後ろから声をかけてきた。やっぱり呼びやがったか・・・。
「何してんの？」
「・・・・・見てわからねぇか？　買い物だ」
「そうじゃなくって！　誰に買うのかなぁ？・・・って」
「・・・・言いたくないんだが」
当然だ。俺は、妖夢に仕方なしに、だが・・・プレゼントを買いに来たんだぞ。
なんて言うか、リリカにばれると恥ずかしいような、なんと言うか・・・まあ、そういうことだ。
「少なくとも、お前じゃないとは言っとく」

「えぇぇぇ～！　じゃあ、誰？」
「言わん」
「じゃあ～、言わないと～、楽器演奏させてあげないよ？」
「うっ！」
「それにぃ～、また昨日と同じことしちゃおうかなぁ～？」
「こ、このっ・・・！」
「どう？　言う気に、なった？」
「チッ！　しゃーねぇな！　・・・・・・ほら、昨日言っただろ？
妖夢との約束、すっぽかしてきたって」
「あ、うん。そだね」
「あれ、俺が『行けない』っていって断ってきたんだ。その理由が
ものすっごく他愛もない理由だったからさ・・・詫びに、何かアク
セサリーの一つでも、って思ったんだよ」
「おお、意外に友達思いな一面。ちょっと見直したっ」
ばん、と俺の背中を叩くリリカ。
「じゃあ、このリリカさんが選ぶのを手伝ってあげよう！」
「あ・・・いいのか？」
「もっちろん！　男だけじゃ、女の子のプレゼントなんて買ってあ
げられないでしょ？」
「まっ、まあ・・・それは・・・そうだが・・・」
「じゃあ、つべこべ言わず従っとく！」
ったく、仕方ねぇな・・・。
「・・・で、その女の子はどんな格好してるの？」
「えっと・・・髪は白のショートボブ、服は・・・緑基調だな」
「ほうほう・・・じゃあ、これなんてどうかな？」
それは、リボンのついた黒いカチューシャ。
「ほら、白と黒のコントラストが・・・って事で」
「・・・・・・どうだろうな・・・？」
「多分似合うよ。まあ、見たことはないから保障はしないけど」
まあ、俺には何が似合うかもわからねぇし・・・そうだな、これ

にしとくのが一番無難かもな。
「俺が選んでもわからねぇし、これにしとく」

「ん。じゃ、またね。・・・あ、そうだ」
「何だ？」
「あのさ、明後日なんだけどさ・・・最終日なの」
「あ、ああ・・・」
「で、トリで私達が演奏することになってるんだけど・・・どうしてもフルオーケストラ入れたいんだよね・・・」
「で？　どうしたよ」
ああ、知ってるさ。敢えて問うのさ、ちょっとさっきの仕返しにな。
「もっ、もう・・・わかってるくせにぃ」
肩をつんつんと突いてきやがる。
しかしまだ許してやる気などない。
「さぁな～、知らねぇな～」
「っ・・・仕返しのつもり？」
「どうだろうなぁ？」
「・・・・だから、奏くんにサポメンとして出て欲しいわけよ！
どう？　これで満足？」
「ああ、満足した。・・・しかし、いいのか？　お前らのファンの、六割方に顔見られたぞ」
「だいじょぶだいじょぶ。指揮は後ろ向いてするから」
「そうか・・・そうだな」
「で？　やってくれる？」
「ん～、わかった。やる」
「それでこそ奏！」
「関係ないと思うが・・・」
「じゃっ、また今度ね～！」
リリカは、いつぞやの巫女のように唐突に現れて唐突に消えた。

ったく、仕事を任されたってのにちょっとわくわくしてきた俺は何なんだっての！
「フルオーケストラ・・・か。面白そうだな・・・」
指揮者として、期待を感じずにはいられねぇな・・・っと。そうだ、早く妖夢に持ってかねぇと。

「妖夢ー、どこだぁー？」
白玉楼は、幽々子が留守のようで、馬鹿みたいに静かだった。
妖夢も一緒か？
「はぁ・・・仕方ない、妖夢の部屋にでも手紙つけて置いとくか」
待ってて、直接渡すほどでもねぇし。
自分の部屋で、『この前の約束を断った侘びだ　受け取れ』と走り書きし、綺麗にラッピングされた箱に添え、妖夢の部屋に置いた。
「よし・・・これでいい・・・」
「・・・・・・奏？」
・・・これは失敗。
いつ妖夢が帰ってくるか、わからなかったから・・・あはは。
「どうしたの？　ていうか、何してるの？」
ここは、冷静かつ的確に判断して・・・よし、この答えだ！
「・・・お前がいなかったからな。そこの箱の、やるよ。この前の侘びだ」
と言って、手紙をさり気に抜き取る！　よっし、作戦は成功！
「・・・そ、そう。ありがと」
「じゃあ、俺は戻るからな」
「わかった、じゃあね」
と、踵を返し襖を開く・・・直前に、妖夢から声がかかる。
「その紙、なぁに？」
「っ・・・！！」
ミッションフェイルド！

ちっくしょう・・・なんとか隠そうとしたんだがな・・・。
「ああ、別に。さっき行ったのと同じ内容が書いてあるだけだ」
「なんだ、つまんないの」
ちょっとイラッと来たが気にしない。とりあえずここから抜けることが先決だ。
「そうか。じゃあな」
襖を閉め、急いで雑貨屋へ向かった。

「・・・・・・」
なんでまたここに来たのかって？
そりゃ・・・リリカにさっきの礼を・・・だな。
・・・・・・まあ、余計なのはわかってんだがな。
とりあえず、礼を尽くすのが東洋人だろ・・・な、そうだろ！？
何となくだが、俺は東洋人な気がする。
だから、俺は人に対し、なるべく最低限の礼節を弁(わきま)えるようにしている・・・いや、だからリリカがどうとかじゃなくて、これは礼だって！
「・・・・・・この指輪・・・」
ピンと来た。
星型の赤い宝石が入った指輪。
・・・えっと、ルビーだと？
たっけぇ・・・。ありえねぇ・・・。
ここの貨幣はいろいろあるが、俺のもっている貨幣は『円』だ。
それに換算しても、軽く2～30万はする。
指輪の金属は・・・世にも有名なミスリル鋼。冥界では無駄なほど採れるから、さほど価値はないが。
「ちっ・・・」
欲しいが、高い。
どうしてくれようか。

「・・・・・・あ、もしかして・・・・霊体の子？」
「・・・あ、ああ、そうだが・・・」
後ろから、誰かよくわからん奴が来た。
「私、貴方の演奏、聞いてたの！」
「・・・・・・あの、プリズムリバーの楽器の？」
「そうそう！」
おお、聞いてる奴がいたか。あれは、まあ、いろいろ失敗だったが。
「いやぁ、すっごくよかったね！　たったあれだけの楽器で、『ラプソディ・イン・ブルー』を再現できるんだからさ！」
「そっ、そうか・・・？」
「うん、そうだよ！　・・・で、それ、・・・誰にあげる気？」
「うぅぅぅ・・・まあ、買えたら・・・リリカにでも・・・と思ったが」
「え・・・リリカ・プリズムリバー？」
「そうだが・・・最近、仲よくなってな。これ、似合いそうだったから」
そう言うと、少し驚いた様子を見せた。
「・・・・・・えっとね、この指輪には、ある想いが込められてあるの。魔力鋼であるミスリルは、アクセサリーにすると想いを伝える力を持って・・・ほら、それには『ずっと一緒』って裏に彫ってある」
指輪の内側を見る。
そこには、『Ｉ　ｗａｎｔ　ｔｏ　ｂｅ　ｗｉｔｈ　ｙｏｕ』と、綺麗な文字で彫られてあった。
「あと、ミスリル鋼で作られたアクセサリーには、それを伝えたい人を引きつける力もあったりするんだよ。・・・・・・これをあてた、って事は・・・君は？」
にやっ、と怪しい笑いを浮かべた。
「ちがっ、違う違う！　そんなんじゃないっての！」
俺は、とりあえずそれを全否定しておく。

「でも・・・まあ、かくしててもわかるし。・・・私のおごりで、買ったげようか？」
「え？　でもこれ・・・」
「もう！　これでも私、有名な庄屋の娘なんだから！　このくらい大したことじゃないし！」
「しかし・・・」
「・・・ん～、じゃあ、これでどう？　貴方の最初のコンサートチケットと交換、ってのは」
「・・・・・・そうだな・・・」
「お？　前向き？　ひょっとしてもう決まってたりするわけ？」
・・・・・・冗談交じりが逆に怖いんだが・・・。
「・・・決まってる。明後日、『樂祭典例会』の最終日、トリでプリズムリバーのバックなんだが・・・それもありか？」
「もち！」
「じゃあ・・・っと、ほら、これ」
ほんとに、あの三人には悪いと思う。
『樂祭典例祭』のフリーチケット、俺のために用意してくれたのに・・・すまん！　と、心の中で謝っておく。
「おお！　これは・・・ＶＩＰでも入手に苦しむフリーチケットを・・・こうも簡単にっ！　さっすが未来のスターは違うねぇ！」
「は、はは・・・」
「・・・・・・あーちょっと店員さーん！　この指輪、くださーい！」
感謝感激・・・。すごく助かった。

そして、俺はプリズムリバーの宿泊先へと向かった。
「・・・誰かいるか？」
軽くノックして、聞いてみた。
まだ、ライブの時間ではないはず。

「・・・・・・いねぇな・・・・」
リハか。ちっ、仕方ねぇ・・・。
入るのは忍びないから、また明日渡そう。

白玉楼に戻ってくると、慌しそうに妖夢がかけてきた。
「奏！」
「よう。どうした？」
「どう？　似合う？　これ」
頭に、俺のあげたカチューシャをつけて、くるくる回ってやがる。
「それだけの為に走ってきたのか？」
「いや、まあ、なんというか、その・・・ありがとね」
「ん。別に・・・侘びだ、侘び。大したもんじゃねぇし」
「でも、奏がくれた、っていうのが大事なんだって」
止まって、俺の肩をぽん、と叩く。
「そんなもんか？」
「そうそう」
「・・・・・・わっかんねーなぁ・・・流石に、女心ってのは」
「はは・・・じゃあ、私もう行くね」
「おう。じゃぁな」
手を振りながら、妖夢は走り去っていった。
仕方ない。とりあえず幽々子に明後日の事を話さねぇとな。

その数分後、妖夢の自室。
「・・・・・・っ、やっぱり、そうだったね・・・」
自らの霊を抱き、泣き腫らしている妖夢。
「私だけじゃない、私に振り向かない。わかってるのに・・・・・・！」

途中までは必死でもがいていた霊も、今ではもう微塵も揺るがない。
「つらいよ、奏・・・・・・こっちを向いて、くれないんだもん・・・・・」
誰に助けを求むでもなく、彼女は一人、自らの想いと言う枷に囚われていた。
（私だけに、くれたわけじゃないんだよね・・・・・・）

その日、プリズムリバーの宿泊先にて。
「・・・・・・」
ベッドで横になり、リリカは自嘲の表情を浮かべていた。
（全く、何やってんだろ、私・・・はは っ、馬鹿みたい）
口にこそ出さないが、心の中で自分をなぶっていた。
（自分でプレゼント選んどいて、他の女の子にあげさせといて、何でこんな傷つくかな・・・ほんとに、馬鹿だ・・・私）
その空の・・・何も映っていない目は、来訪者に気づくことはなかった。
「リリカ」
言葉がかけられてから、彼女はその存在を知った。
「・・・・・・・・・」
「大丈夫？　ってきいてもだめか」
「・・・・・・ごめん、今は話す気分じゃないの」
「そう・・・わかった。でも、良かったの？　居留守なんてして」
「どんな顔して会えばいいか・・・わかんないもん」
「馬鹿ねぇ・・・そのままでいいじゃん」
「良くないよ、だから悩んでるの・・・」
「何でよ。リリカは、善意とかでやったんでしょ？」
「でも、結果的に私は・・・奏がプレゼントする相手に嫉妬なんてしてる。・・・馬鹿だよ、私は。奏が、私のためにやってくれた事なのに、その責任も取らせたくないなんて・・・」

「・・・・・・そう？　でも、このシチュエーションだからでしょ。好きな子が自分以外に目を向けてる、ってことだけだったら、立派に嫉妬の理由が立つよ？」
「嫌。私は、大嫌い。嫉妬なんて。あんなことで悔しいなんて」
（この子にとったら、理由がどうとか、関係ないのね。要は、自分の嫉妬心に嫌気がさしてる・・・ってわけね）
シーツをきつく握り、歯を食いしばり、涙をこらえている。
「もう・・・誘わなきゃよかった。どんな顔して会えばいいのよ。私、奏のことばっか考えてさ・・・馬鹿じゃん・・・」
その嘲りに満ちた声は、聞いている側の首を絞めているかと錯覚するほど悲痛だった。
「どこが？」
「いろいろよ。奏と一緒にいること、一緒に演奏することばっかし考えて、仕事に力が入らない」
「うそ？」
ルナサは、わかっているようだ。
「後者はうそ」
辛さはまだ抜けない。
「じゃあ、自然。リリカそのものよ。ちょっと、『好き』が膨れ上がっただけ。たいした事ない」
「違うよ」
「・・・・・・自分じゃないって？」
「こんなの私じゃないもん。普通は私、もっと利己主義で狡猾で姉さんたちを嗾（けしか）けるのが楽しくて仕方ない・・・」
「そこまでっ。何気に本性を出さないの」
「・・・・・・」
「あ・・・そう言えばさ、どうして奏くんのこと、好きになったの？」
「わかんない。奏の音楽をもっと聞きたい・・・そう思っただけ。・・・冥界見物に誘ったのも、また来てもらえたらって考えたから。

でも・・・」
そこでリリカは、俯いてしまった。
「でも？」
一瞬躊躇い、そしてまた言葉を紡ぎ始めた。
「・・・・・・・・・そうじゃなくなった。詳しくは言えないけど、奏の・・・音楽じゃなくて、それを作る心に惹かれたの。水の音色に応え、風の拍子を捉えて、とっても綺麗な音色を創造する・・・そんな奏だから、一緒に居たいって思ったんだよ、きっと」
奏の話題に切り替えた途端、リリカは顔が緩んだ。そのような顔を、ルナサは一度も目にした事はなかった。
リリカが笑うときは大抵、何か可笑しい時や楽しいとき、たとえるなら向日葵の如し明るさだった。
しかし、今リリカの浮かべる笑顔は・・・どれにも当てはまらない。誰かを想う時の笑顔ということだろう。それをたとえるとすれば・・・蒲公英（タンポポ）。儚く、危うげで、それなのに信じることができる・・・・・・そんな顔だった。
（そうだよね。もう、私はどうする必要もない。・・・・・・ほんのちょっと背中を押せばいいんだよ）
リリカの頭に手を乗せて、ルナサは言った。
「その表情、忘れないで。・・・たとえ変わっても、リリカはリリカだよ。変じゃない」
「変だよ。こんなの」
ベッドのシーツに包（くる）まって、リリカは呟いた。
「変化を受け入れないのは、退化することと同じ・・・・・・偉い人は言いました」
「・・・・・何で？　私、こんなんじゃ奏に嫌われちゃ・・・」
「ううん、そんなことないよ。第一、奏くんには嫉妬してるなんて、ばれてないじゃん？」
「邪険に扱っちゃうよ・・・多分」
「でもさ、奏くんの事、好きなんでしょ？　だから嫉妬なんてする

んでしょ？」
「・・・・・・・・・」
「だったらさ、それでいいじゃん。奏くん、物わかり良さそうだからさ。多分、リリカの気持ちもしっかり受け止めるって」
「そう・・・なの・・・？」
「確証はないけどね。・・・・・・あ、後、明後日のステージに奏くん呼んだよね？」
「・・・・・・うん」
「リリカ用に変色できる衣装、買っといたから。明後日はそれ着てよ」
「はぇ？　なんで・・・？」
「ふふっ、それは着てみなきゃね～・・・じゃっ、お休み～」
「・・・・・・・・・」

夜は更けていく。

ａｒｅｎｅ：ｈｕｉｔ　悲愴の鐘～Ｌａ　Ｃａｍｐａｎｅｌｌａ．（後書き）

感想で『甘酸っぱい』と感想をいただいたとき、もうそれはそれは感激しました。
『変わり身早ッ・・・』とか思われるかもしれませんが、小町に対して、奏は『始めてあった奴』以上の感情が抱けていないのです。ただ、流されて小町と一緒にいれば心の平和が保てるから、本能的にそうしただけなのです。

と言う事にしておいてください
それでは、貴方が飽くることなきと、信じて・・・またお会いしましょう。

ａｒｅｎｅ：ｎｅｕｆ　一晩前の幻想～ｓｈｅｈｅｒａｚａｄｅ．（前書き）

シェヘラザード・・・って知らないですよねｗ
自分も正直わかりません。
ただ、この曲がものすっごい幻想的だったって言うのはｗｉｋｉれば出てきます。
それではどうぞ。

ａｒｅｎｅ：ｎｅｕｆ　一晩前の幻想～ｓｈｅｈｅｒａｚａｄｅ．

「幽々子」
「ん？」
「明日、『樂祭典例会』のトリ、プリズムリバーのバックサポーターやるから」
「はへ」
幽々子は朝から重そうなのを食しつつ、応える。
「夜はいねぇから」
「うん」
「じゃあな」

冥界市街地をぶらぶらとしていると、ルナサと会った。
ついでに、メルランも一緒だ。
「やぁ、奏くん」
「よう、ルナサ、メルラン。・・・これからどこに行くんだ？」
「えとね、雑貨屋さん。君が昨日いたところでね、すっごく綺麗な指輪を見つけちゃったんだよ。それを買いにね」
思い当たるものがあった。
今も、内ポケットにしまわれてある。・・・・・紺色の、リングケースに。
「どんなのだ？」
「えっとねー・・・赤い星型の宝石が入っててね、ミスリル製なの」
「・・・・・・」
ビンゴ。俺の買ってもらった奴じゃん。
「・・・・・・俺、それ、もう買っちまったんだが」
「はぇ？！　あんな高かったのに？！」
「庄屋の娘、とやらにな。チケットと交換だった。・・・・・・あ

の、『ラプソディ・イン・ブルー』を気に入ったらしい」
「ファン第一号ってことだね、おめでと」
「ま、まぁな。・・・ところで、リリカに渡しといてくれるか？
これ」
と、上着の裏ポケットを探る。
「ちょっとまった！　それは持っといて！」
「何でだよ」
「ふふっ、それはお楽しみ～。ステージの日に持って来てね」
「・・・・・・」
怪しい。実に怪しい。何かを企んでいる顔だな、こいつは。
「・・・・・・わかった、そうする」
「よろしい。あ、衣装はこっちで用意するから」
「おう」
まだニヤニヤしてやがる。怖い。
「じゃあ、またね～」
「また明日ね～」
手を振りながら、ルナサとメルランは去って行った。
「・・・・・・怪しいな、あいつら」
マスターのところで、リリカの『いつもの』でも貰おうか・・・。

白玉楼に戻ってくると、妖夢はなにやら難しい顔で、あの大樹を見ていた。
「どうした？」
「どうやら、あの妖気の臨界距離は、ここくらいなんだよね。これ以上近付くと、半霊が暴走しだすの」
「怖いな、それは・・・」
「斬るに斬れないというか・・・近づけないんだ」
「・・・・・・じゃあ、刀貸せ。俺が切ってくる」
「え？　でも、これすっごく重いよ」
「気にすんな。俺にはこの指揮棒がある」

軽く振って、剣の周りの空気を動かす。
「よっ・・・と」
鞘から抜き、大樹へ向けて飛ばす。
案の定、剣は大樹に刺さった。
「さて。後は・・・」
剣に霊力は乗っていない。はてどうしたものか・・・
「ねえ、知ってる？　この剣は、周りの霊力を操作できるんだよ」
「ほう・・・。それはまた便利だな」
「じゃなきゃ剣から弾幕なんて放てないよ」
「それもそうか」
破壊のイメージ・・・どんな曲がいい・・・？
霊力を操作するのに特定の目的を持たせるとき、俺は曲を思い浮かべて指揮をすることがある。そのほうが的確かつ最大限に霊力を操作できるのだ。それに、そのほうが割と楽しいし。
「・・・・・・ん～・・・・・・」
『シェエラザード』・・・幻想的・・・って言うのが一番な曲か。
これを作った奴の望む桃源郷が、ここなんだろうな。
よし、これでいこう。
「・・・どうしたの？」
「ん、別になんでもない。気にしないでくれ」
《切り裂け、刻め、夢幻地獄の狭間へ堕とせ》
鋭く、強く、何処までも。何度再生しても、もう一度斬る・・・。
「わ・・・凄いことになってるよ、奏！」
「わぁってる！」
妖夢の言うとおり、剣を中心に風がその大樹を切り裂く。
《お前は、いちゃいけないんだ。いるべき場所へ、帰るんだ・・・》
聞こえる。この樹の、断末魔が。
『なぜ、どうして、冥界にいることすら許されぬと言うのか、私は！！』
《お前は何処にいたい？！　ここか？！　冥界にいたいのか？！》

『永住の地、安息の場所、それがあるのなら何処(いずこ)とも問わぬ！　貴が与えてくれようと言うのか、それを！』
《お前が民を惑わさなければ、それはここだった！》
『私は自らの意志で人を惑わしはしない・・・それは私から滲み出た力の片鱗！　それは惑わされる者の責任だ！』
《ならばここは、お前の永住の地ではない！》
全力開放、風は大樹に、最後の一撃を加えた。
《地獄にでも、行くんだな》
『がっ、ぁ、ぐ――――――――――』
「・・・・・・つ、疲れた・・・・・・」
そこで、俺は意識が絶えた。霊力の使いすぎ・・・だ。

arene:dix　舞踏への招待～Aufforderung zum Tanz

さて・・・もうちょっとですねぇ・・・
あぁ、書くことがない・・・

目覚めれば、柔らかな朝の光が俺を照らしていた。
障子からわずかに差し込む陽光が、少し目にしみる。
「・・・・・・どうしたんだっけな、俺・・・・・・・」
ふと、横を見た。
「ん・・・」
妖夢が、俺の布団のすぐ横で寝ていた。
自分の布団を敷いて。
「・・・・・・？」
よくわからないが、時間も時間・・・辰の一つ（八時半ごろ）。
朝飯を作る妖夢としては、もう起きていなければいけない時間だろう。
「おい、妖夢・・・妖夢。いい加減起きないと、やばいぞ」
「・・・・・・ん・・・・奏・・・？」
目をこすりながら、妖夢は起きてくる。・・・まだ、眠そうだ。
「昨日、倒れたままだったから、部屋に運んだんだよ・・・大丈夫だった・・・？」
「あ、ああ・・・ひょっとして、ずっとついててくれたのか？」
「えへへ・・・途中で寝ちゃったけどね・・・って、もうこんな時間？！　ごめん、また後で！」
妖夢は、なにやら忙しそうに立ち上がって朝飯を作りに行った。

昼前、そろそろ行こうかと思い始めたころ。
（たぶん、リハとかあるよな・・・）
「奏、お客さんだけど」
妖夢が、そんな事をつげにきた。
「ん・・・？　俺にか？」
「プリズムリバーの人らしいけど・・・通していい？」
迎えに来た？　えらく用意周到だな・・・。
「あ、いや、いい。俺が出る。そろそろ出かける頃だしな」
そう言って、俺は外に出かけた。

「あ、奏くん」
「ん？　ああ、ルナサか」
てっきりリリカかと・・・いや、なんでもない。
「・・・その顔はひょっとして」
「何だ？」
俺の顔を覗き込むなり、ルナサは言った。
「リリカのほうがよかった？」
「ッ！！」
「やっぱり、図星かな」
何・・・だと・・・？　的確に当ててきやがった・・・！
「そんな事は、・・・」
ない、と言おうとしたとき。
「やぁ、奏」
「っんな？！」
ひょこっ、とリリカが顔を出した。
思わず、こけそうになった。・・・いや、こけなかったけどな。
「そんな驚くほどの事？」
ルナサが糸目のまま、軽く首をかしげた。
いや、驚くだろ普通！！　扉から一番想定してなかった奴が現れた

んだから！！
「す、すまんリリカ・・・少し取り乱した・・・」
「ごめんごめん、まさかそんな驚くとは思わなかったから」
てへへ、と笑いながらリリカは後頭部に手を当てる。
「・・・・・・で？　どうしたんだ、俺が行けばよかったんじゃないのか」
「いやあ、リハはとっくに始まってるんだけどね・・・時間を言ってなかった私たちにも責任はあるんだけど」
「・・・・・・すまん。俺がちゃんと時間を聞いていればよかったんだ」
「別に、奏は最後の一曲に登場するだけだから・・・大丈夫だと思うよ」
「そうか。そうだな・・・」
「で、曲を覚えてもらいたいんだけど・・・曲の基礎はウェーバーの『舞踏への招待』。それにちょこっとアレンジを加えた奴・・・奏と、あの川で演奏した奴と似てるかな」
舞踏への招待・・・聞くからにワルツだな。あの川から聞こえてきた音楽だとすると、相当ハイレベル。
「で、これが楽譜。パート数はフルオーケストラ分にピアノ二台・・・一台は私がシンセでやるから。そうそう・・・この三ページ目・・・ほら、ここの一段、ヴァイオリンとコントラバスがかなり近くなるから、気をつけて」
「・・・・・・っ・・・やべぇぞ、これ。相当、不可能譜面に近いんじゃねぇか」
「アレンジ前は割にできる曲なんだけど、これに奏くんが指揮する以外のパートがあるからさ・・・ごめん、できる？」
「まあ、できないことはないが・・・」
「んじゃあ、任せたよ」
と、俺は無駄に高難易度なフルオーケストラを任される事になった・・・・・・・・・。

「奏くん、ちょいちょい」
「ん？」
幽々子が、俺に手招きをする。
「奏くんを借りてもいいかな？　いやなに、十分くらいでいいからさ」
リリカに聞くか？　ここで。
「いいですよ、十分くらいなら」
「そ、じゃあ行こうか、奏くん」
「俺の意見は・・・」
「無視無視っ」
あ、そうですか・・・・・・。
幽々子に手を引かれ、俺はその辺の部屋に連れ込まれた。
手を握った瞬間、リリカが少し苦い顔をしたのは気の所為か。

「仕事の件なんだけど・・・・・・大分ここにも慣れてきたんじゃないかな？　そこで、とりあえず考えておいて貰いたいんだけど」
それは考えてなかったな・・・・・明日から真剣に考えておこう。
うん、明日からだ。
「そうだな、わかった」
「えっとね・・・ほら、これ」
と、取り出したのは一枚の紙。どうやら、かなり高級な和紙で出来ているようだ。
金箔で縁を彩られ、深い藍染の墨で文字が書かれている。
「『就職許可証兼住所登録証』・・・まあ、仕事と住む所の登録用紙ってところかな。決まったら、これ書いて私に見せて。住所のところは白玉楼にしてあるからいいけど」
「あ、ああ・・・・・・そうか、わかった」
俺は、その紙を受け取り、ジャケットの裏ポケットに丁寧に仕舞い込んだ。
「じゃあ、またな」

「ん、じゃね・・・・・・妖夢―！　お茶とお菓子持ってきてー！」
『はーい、畏まりましたーっ！』

・・・・・・・・・・・・・・
「すまなかった、待たせちまって。じゃあ、行くか」
「ほんと、立ったままって辛いんだよ？」
「・・・・・・飛んでるけどね」
「細かい事は気にしない！　いっつみにまむ！」
「・・・・・・行こうか、奏」
「あぁ、そうだな」
意外とルナサが饒舌だったことに驚いた・・・・・・。
そして、俺たちは特設ライブ会場へ向かった――――――――――――――――――――。

結局、俺がやる曲は一曲・・・『舞踏への招待』だった。
リリカのリードシンセサイザー、ルナサのリードヴァイオリン、メルランのソロトランペットを除けば、俺のパートはフルオケ・・・正直無理があると思う。しかし、ここで退くなど、小町に名乗った『霊奏の指揮者』のプライドが許さない。
それに、リリカにあの指輪を渡さないといけねぇしな。
「あのねぇ奏くん、指輪ってね、一回その指にキスしてからはめるもんなんだよ」
ルナサから聞いたが、本当かどうか・・・正直怪しいが、一応聞いておく。

え？　ああ、俺が指輪をはめてやる事にしたのさ。そのほうが喜ぶ、ってルナサとメルランも言ってたしな。なにより、俺がやりたかっただけだが。

「よっ、メルラン」
「あ、奏くん。リハ、もうほとんど終わっちゃったんだけど・・・これから練習入る？」
「私らは・・・？」
「うん、やばいね」
「やっぱり・・・・・・」

指揮台に上がり、指揮棒を構える。
《まず、全体で一度音を出してみるか・・・・・・》
・・・・・・・・・・・・・・
問題ないな。よし、とりあえず一回、やってみるか。
「あ、奏」
「ん？　なんだ、リリカ？」
「あのさ、奏ってまだ曲聴いてないよね？」
「あぁ、確かに」
「一回聞いて、イメージをつけてみてくれない？」
イメージ・・・か。確かに、つけておいたほうがいいな。
「そっちの方が、いい音楽になるだろうし」
「そう、だな・・・・・・、頼む」
「まっかせなさぁ～い。姉さんたち、やって！」
「リリカも演奏してよね」
「勿論」

曲の雰囲気は、跳ねる様な回るような・・・厳かさとは遠い、軽いメロディが特徴的だ。
ピアノ交響曲ならではの速さも感じる。
これを、動きの遅いフルオーケストラからどう再現するか・・・・・
いや、違う。
再現じゃない、創造だ。この旋律を、いかにフルオーケストラで創造するか。
「・・・・・・よし、やるか」
「おー！」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
「・・・ストップ！」
《何？　どうしたの？》
「・・・・・わからないのか？　個々で、若干ズレがある。それに、コントラバス・・・もう少し軽く。スローダンスじゃないんだ、もっと軽く跳ねるように！　ヴァイオリン、一回四ページの右上から」
いったん弾かせてみる。しかし・・・
「ちッがぁーう！　ヴァイオリンだけ、『てってって～』じゃなくて『て～て～て～』だ！　もう一回！　ベース音だ、って意識して！」
まだ、完成には遠いかも・・・。
「・・・・・なんか奏くん、やたら力入ってるね～・・・」

と、ルナサが。
「まぁな。始めての舞台だ、出来るだけ完璧にしたい」
「おお、気合十分」
リリカが軽く褒める。
「・・・・・その・・・・お前との、始めての舞台だからな・・・・」
「か、奏・・・」
《惚気も、いい加減にしろよ・・・》
「ぁ・・・すまん。じゃあ、四ページの始めから！」
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「すぅ――――――はぁ――――――――――、やっぱ落ちつかねぇ・・・」
本番が始まって、俺の出番はまだ二時間二十五分先・・・・・・。
「すぅ――――っ、はぁ――――――――――・・・駄目だ、何回やっても落ちつかねぇ・・・」
だが、ほとんど練習してない俺は、それはそれは計り知れないプレッシャーに潰されそうになっていた・・・。
失敗への不安は元より、それ以上に俺は『プリズムリバーを知ったばかり』とプリズムリバーファン共にばれてる。その俺がいきなりステージ・・・ヤバイ、殺される。
「あぁぁぁぁ・・・」
指揮棒をくるくる回す。
ふと、楽譜が目に付く。・・・俺のじゃねぇな。
「・・・・・幽霊楽団~Ｐｈａｎｔｏｍ　Ｅｎｓｅｍｂｌｅ・・・なんだこのカオスなパート分けは」
ピアノ、クラ、ヴァイオリン、トランペット、コントラバス、ドラム。

「うへぁ、まだＡｎｉｍａｔｏとかＡｌｌｅｇｒｅｔｔｏも書かれてないぞこれ・・・でも」
こいつらの『本質』みたいなのが出てるな。
イントロは抑え気味（Ｐｅｓａｎｔｅ）に、技巧派のリリカを立たせ、聞く人の関心を＆ａｍｐ；＃２５６８１；む。
次のメロディは、クラリネット、クラシックギター・・・そしてシンセサイザーならではのスプリットシステムで、一つの鍵盤で二つ以上の音・・・三人の関係が最も出ている。
　大きくなるサビの部分は力強く（ｆｏｒｃｅｆｕｌｌｙ）。出力の小さいピアノを抑え、代わりに高音の出るヴァイオリンと大音の出るトランペットを思い切り前に出して演奏。
最後はメロディをもう一度繰り返す・・・以下ループ。
この間、全く時間は考えてなかった。
「ここをこうして、後はここにエンドメロディを組み込んで・・・よし、出来た」
ループを二回に抑え、あとは終わりっぽい旋律を入れて完成。多少なりともあいつらの本質を理解したつもりだが、流石にこれはおこがましいか・・・？
「・・・・・・ふむふむ、いいじゃないか」
「ッ？！」
突然、背後から声がした。そりゃまあ、反射として俺はピクリと背を震わせる。
「んで、ここをｒａｆｆｒｅｎａｎｄｏ（抑えながら）にした方がいいんじゃ？」
ルナサは、軽く呟く。
「あぁ、確かに・・・・・・っと、まてよ。ここはとりあえずｐｉａｎｏだけで十分だろ」
「うぅむ・・・・・・・・って、こんなことしてる場合じゃない。奏くん、本番だよ」
「へ、もうそんな時間か？」

部屋の時計を見ると確かに本番予定時間・・・その四十分前。
「よし、行くか」
と、俺は立ち上がり、歩き出す。

「・・・・・立てば石像、座れば巨岩、歩く姿はがっちがち・・・・・・うん、これはいいね」

後ろから一言、ルナサが呟いた。
だが、そのときの俺は意識などできるわけがなかった。

「奏？　えらく緊張してる？」
「・・・・・・まぁな」
頭の中で楽譜を思い浮かべて、それをただひたすら具現化することを考えている。
「さて、行こうか」
「おう」
あー、からだが動かせねぇ・・・。

ゆっくり壇上に上がり、静かに指揮台へ向かう。

「おい、あいつ・・・」
「この前の新入り・・・」
「どうして衣装着て指揮台になんて・・・！」
ほら、予想通り。俺は叩かれるに決まってんだ。
それでも、俺は少しでもいい音楽を作るんだ。それが、プロってもんだろ。いや、プロじゃねぇけどな。
「・・・・・・いいか、お前ら」
《・・いまさら何を？》
「聞く側を考えた演奏・・・したことあるよな？」
《当然でしょう。僕たちは、そのためにここにいる》
「お前ら自身が楽しむことよりも、今は聞く側が楽しめる演奏を心がけろ・・・わかったな！」
《はい、承知しました》
譜面台をこつこつと叩き、演奏の準備を整えさせる。
「最初の晴舞台・・・いったいどんな演奏を見せてくれるのかな・・・？」
来賓席で誰か呟いた気がしたが、俺には聞こえていない・・・多分。
指揮棒をあげ、演奏を開始する・・・・・・！

《まずはオーボエ、クラリネット、フルートの管楽器で静かに始めて・・・》
始めの二十小節はほとんど動かない。静かに、しかしあくまで先に待つ軽やかさに期待膨らませつつ・・・いち、に、さん、よん・・・よし、ここだ！
《弦楽器団、入って！！　ピアノ、高音は立ちすぎないで！》
　オーケストラの重みなどいらない。舞踏会では流さない。子供でも踊れるワルツを、静かに、リズミカルに。物語を読み聞かせるように・・・そう、それでいい。
小さく、副旋律を今は外にない幻想の音で・・・
《リリカ、この辺の音注意して》

《あいあい、さー》
ヴァイオリンはもう少し大きく・・・
《ルナサ。もうちょっと前へ出てもいいぞ》
《わかった》
クラリネットは高くなりすぎないで・・・
《メルラン、はしゃがない。クラリネットはそんなにテンション高くないし》
《ちぇ～》

「おい、なかなか巧いんじゃねぇか？」
「それなりのもんだな」
「ちゃんと三姉妹の音楽性が協調を取ってるしな」

客の反応もそこそこ・・・そろそろ、だな・・・。

《調が変わるぞ・・・暗く、一瞬の通り雨のように・・・》
《奏、言ってることが恥ずかしいよ》
《っ？！　す、すまん！》
《・・・奏くん、そろそろ・・・》
ルナサが俺を制す。そろそろヴァイオリンがトーンを落とすころなのではないか、と。
《ヴァイオリン、しばらく休んでろ。コントラバス、もう少し大きめに。クラリネット、主旋律に。副旋律、リリカは少しくぐもった音を。ホルン、リリカの下でベースを》

とまぁ、途中まではものすっごく上手く行ってた訳だ。

《最後の締め、しっかり伸ばして・・・》
《！！》
リリカが一瞬戸惑って、ほんの６４・・・・・・いや、１２８分ぷほ

どズレた。
観客はそんなことを一切気づかないが、俺やルナサ、メルラン、霊具の楽器たちも確かに気がついた・・・・・・・・。
「わ――――――――――!!」
沸き起こる拍手喝采。始めて上がったステージで得られると思わなかった高評価。だが、俺はそんなことを気にしてはいられなかった。指揮台から降り、一礼。そして、いつの間にかいなくなっていたリリカをステージ裏へ探しに行った。

arene：onze　幽霊楽団～Phantom　Ensemble.（前書

ラストイベント直前
バッドエンドは見たくない

ったく、どうしたってんだよ。演奏はほぼ完璧のはずだろ？　それを、ほんの一瞬ずれたからって気にしやがって・・・。

「リリカは？」
ふと隣に見かけたルナサに、リリカの居場所を問う。
するとルナサは意外そうに、
「へ？　そこの控え室だけど・・・」
と少し先の部屋を指す。
「知らなかったの、奏くん？」
「あ、あぁ・・・」
「てっきり、もう会いに行ったのかと思っちゃった。・・・リリカ、相当落ち込んでるみたいだよ。励ましてあげなよ、奏くん。君くらいしか、適任いないし」
そう言われると、なんだか少し気恥ずかしくなる。あぁ、ちょっと顔が赤いのかもな、俺。
ルナサが少しニヤついてるけど、まぁ、いいか。とりあえず、ルナサに「ありがとな」とだけ言って、リリカの部屋へと向かう。
「・・・・・・リリカ？」
『・・・・・・入ってこないでよね』
リリカは、俺に少し冷たい声で、呟いた。
ノックする前から入室を断られた。始めてなんてもんじゃねぇな。
「すまん、リリカ。もっと前の小節から言ってりゃ、こんな事にはならなかったんだが・・・」
『違う。あれは、私が悪かったんだよ。『流れ』そのものをちゃんとつかめてなかった所為で・・・』
「っていうか、何で俺は締め出されてんだ？」

『・・・私のこんな顔、奏には見せらんないし。どんな顔して謝ればいいのか、わかんないし・・・』
「・・・・・・・・・」
そんなことかよ。謝る必要なんてねぇし、どんな顔でもリリカはリリカだろ？　わかってねぇな。いや、あいつのこともわからんでもないが、些細過ぎると言うか、俺にしてみりゃどうでもいい事って言うかさ。でも、リリカはそれが凄く大事そうだし。俺がそれを蔑ろにしちゃ、あいつに悪いだろ、流石に・・・。
「なぁ、リリカ」
『・・・何？』
よかった。さっきより少し、声に抑揚が戻ってきた。
「入っていいか？」
え・・・？　さっき言ってたことと矛盾してないか？　まぁ、そうだよな。リリカの気持ちを無視してるといえば無視してるよな。でも、さっきと違うのは・・・・・・。
『・・・・・・うん』
リリカは今、俺を拒絶なんてしない・・・そんな馬鹿みたいな確信があったから・・・。
さっき、声に少し表情が戻ったとき、『これは大丈夫・・・だろ』みたいな馬鹿げた何かを感じた・・・だから、俺はもう一度リリカの部屋に入っていいか聞いたんだ。
「・・・・・・何の用？　ひょっとして、笑いに来たとか？」
「さっきの会話から、それはないって思ってくれよ・・・」
「・・・・・・」
「・・・・・・」
なぜか、そこで会話が途切れる。俺は、リリカにどう話を切り出していいかわからなかった。
「・・・ごめん、奏。初めての舞台、私の所為で失敗しちゃって・・・」
リリカは俺に背を向けたまま、涙声で呟いた。

「だから、おまえの所為じゃねぇよ。あれは、俺がもっと前から注意しておけばよかったんだ」
「違うよ。場数が桁違いなんだよ？　私たち。それなのに、舞台慣れしてる私が失敗しちゃ・・・」
「関係ねぇだろ。要は舞台度胸なんだしさ」
その場で、どれだけ普段の実力が出せるか・・・舞台ではそれが問われる。確かに慣れも必要かもしれない。だが、それは慣れがなくてもあれば何とかなる話だ。普段と違う、俺が指揮台に立っての演奏で動揺したんだとしたら、俺の所為だ。もっと、あと一度だけでも練習できていれば、良かったのかもしれない。成功していたのかもしれない。そう考えると、やはり俺が遅れたことが悪い。
「・・・・・だからさ、いろいろ、俺の所為なんだよ。遅れたことで、練習できる回数が減って、おまえが動揺しちまうような状況を作ったことが悪かったんだ」
「違うよ。『弘法は筆を選ばず』、プロはどんな状況でも最高の演奏が出来なきゃ」
「『弘法も筆の誤り』。どんなに巧くても、失敗は付き物なんだよ。だから、おまえが気にすることはねぇ」
そうさ、いくら上手でも、失敗することはある。ましてやリリカの今回のミスは、そう呼ぶには小さすぎるもんだ。そんなのをいつまでも引き摺ってちゃ、多分リリカは先へは進めない。
「・・・そう、かな」
「指揮者の俺が問題ないって言ってんだ」
そう言った直後、背後に気配を感じた。
振り返ると、そこにはルナサとメルランが。
しきりに右手の薬指に、左手の人差し指と親指で作った輪を上下させている。
・・・・・・あぁ、指輪か。そうか、渡せって事か。ていうかこのタイミングかよ。
「・・・・・・リリカ、」

「・・・・・・？」
ポケットに入れていた指輪に触れる。
「あのさ・・・」
「・・・ん」
一秒の間が空き、そして俺はポケットの中の指輪を握り締めた。
リリカのために手に入れた、ミスリル製の紅い宝石が入った指輪。
・・・・・・！！
ミスリルは魔鉱石。人の想いを伝える金属。この場合は、『ずっと一緒』。
作った者の、着けた者の、深い感情が・・・伝わる。
そのなかで一際心惹かれた『情報』。言葉でも、風景でもなく、『感情』として。
・・・・・・・・・・・・・・やっとわかった。
「・・・・・・俺は」
「・・・・・・ぅ・・・」
傍にいたい、見つめていたい、少しでも触れていたい・・・そんな願いを、一言で伝えられる。
「・・・お前が」
そんな、魔法の言葉――――――――――――――――――――それが。
「・・・・・・っ・・・・・・」

「好きだ」

「・・・・・・・・・・・・・・！！」
「・・・・・・・・・・・・・・！！」
「・・・・・・・・・・・・・・！！」
おそらく、三姉妹全員が驚いていることだろう。
まぁ、もうそんなことはどうでもいい。
ポケットから、指輪を取る。
「リリカ。こっち向けるか？」

自分でも少し驚くほど落ち着いた声だった。
「・・・・・・・・」
こくん。
小さく頷き、リリカは俺の方に向く。顔は、俯けたまま。
「この前の礼のつもりだったんだがな・・・」
リリカの右手をとる。少し驚いた様子だった。
「ん」
ルナサに言われたとおり、リリカの手の甲にキス。
「ッ！！」
《奏くん本当にやっちゃったよ・・・》
《真に受けた訳じゃないだろうけど・・・》
「かっ、奏・・・！」
「・・・文句ならルナサに言えよ。礼儀だって、あいつに言われたんだ」
指輪を、その右手の薬指へと運ぶ。
リリカの指に、僅かに指輪が触れた。
ぴくり、と指が震える。
「・・・まって、そこは」
「・・・婚約か？」
「う・・・」
「そう、だな・・・すまん」
中指だよな、普通・・・
「返事、してないから」
「ぁ・・・別に今しなくても・・・」
「今、したいの」
俺の方が、まだ心の準備が・・・
「ぃ、いいのか？」
俺が呟くや否や、リリカは俺に抱きついた。
「奏の言いたいこと、わかったから」
「ぇ・・・・・？」

「私も。私も、一緒にいたいから」
それはきっと、俺の言った『好き』と同じ意味。
「そうか・・・」
俺は抱き返す。
強く、優しく。
「もういいよ、奏。指輪、つけても」
「あぁ。わかった」
もう一度手をとり、キス。
指輪を改めて、右手の薬指へ。
今度は止めない。
そして嵌め終えた直後、

ぱしゅっ、と言う音が俺とリリカから鳴った。

「・・・？」
「・・・・・・」
しゅるしゅるしゅる・・・・・・・と、何かが解ける。
「服・・・？」
「って、まさか・・・！」
「奏、後ろ向いてッ！！」
「お前もなッ？！」
急いで背を向ける。
いったいどうなって・・・？！
黒のタキシードは白に。
指には同じく、白のリング。
靴も純白へと色を変え、服が変わり終えた。
「・・・・・・奏、終わった？」
「あ、あぁ・・・」
振り返り、リリカを見据える。

その服は随分と変わり果てた姿だった。
赤と白の絶妙に組み合わさった（古式）プリンセスラインのドレス。
赤い帽子は髪飾り・・・いや、これは。
「・・・ベール、か？」
なぜかグローブの指は開いている。
「って、これ・・・」
「ウェディングドレス・・・？　トレーンはないけど」
「そんなまさか。指輪はめたとたん、白の紳士服とウェディングドレスって」
ぎぎっ、と後ろから音が聞こえた。
「・・・ふっふっふ・・・」
「やっとか・・・」
「るっ、ルナサ、メルラン？！」
「・・・・・私たちが見てるの無視で、告っちゃうんだもん、奏くん。正直びびった」
「まぁ、こうなるのは時間の問題だったけどねー」
「・・・？　時間の問題？」
「えとね・・・・・・・・・」

ルナサとメルランの話によると。
あの指輪をリリカに着けると、可変式ドレス（本来は色直しを省略するためのものらしい）がウェディングドレスと白のタキシードに変わるようになっていたらしい。この二人の謀略によって。
どうやら俺たちの関係などとうに見越していたようだ。

何かざわざわと外が騒がしい。
「・・・・・・ほら、アンコールかかってる」
「行こうか。ファンを待たせちゃプロじゃない」
「でも、さっきから時間が相当経ってるんじゃ？」
「実際のところ、かかった時間は六分だよ～」

「・・・曲も決めてる」
「？　もう？」
「リリカ、あの時私たち三人で作った・・・あの一曲、覚えてるよね？」
「・・・・・・・・・！！」
リリカが、はっとしたように目を見開く。
「あれを、奏くんがちょっと変えて、作ってくれたの」
「・・・あぁ、あの曲か」
『幽霊楽団～Ｐｈａｎｔｏｍ　Ｅｎｓｅｍｂｌｅ』・・・三人で作ったのか？　てっきり、ルナサだけかと・・・
「ほら、譜面。ループは二回、後は自分で見て」
「はいはい～」
じゃあ、私たちはこれで・・・とルナサたちは消えた。
「二人きりにするなよ・・・」
「わっ、私たちも行こ？」
「そうだな・・・」
俺が歩き出すと、リリカは何故か腕にしがみついて来た。
若干気恥ずかしいが・・・まぁ嫌じゃない。

『アンコール！　アンコール！　アンコール！』
『これは答えないわけには行かないよね？！　っじゃあ、奏くん、リリカ！！』

「呼ばれたぞ、行こうぜ」
「・・・・・・もうちょっとだけ、待って」
・・・・・・？　どうして・・・？
「・・・・・・ねぇ、奏。一つ、約束してよ」

「ん？」
ベールをかけたまま、リリカは呟いた。
「・・・・・このドレスは、結婚する人の着る物なの。だから・・・」
「この指輪は、結婚の約束のための指輪だぞ」
わかってるさ。俺は、リリカの傍にいる。そのための・・・婚約。
「・・・・・結婚して」
「俺から言うつもりだったがな」
上目遣いで俺を見るリリカ。
俺はその顔のベールを取り、笑う。
「・・・リリカ、いいか？」
「・・・・・ぅん・・・・・」
リリカが目を閉じる。・・・それを確認すると、俺も目を閉じ、リリカへと顔を近づけた。
・・・ずっと一緒だ。二人で、最高の音楽を作ろうぜ。
これは約束だ。絶対、裏切らない。
その誓いの証が、この口付け――――――――――――――――――――

《いいか、お前ら！　さっきみたいに気を張らなくてもいい！　思い切り楽しめ！》
《この曲、まさか完成するとは思わなかったけど・・・奏君のおかげだね》
《そうだね。まぁ、あれが適度に緊張をほぐしただろうね》
《・・・・・・・・・》
ゆっくりと、指揮棒を振り上げる。
《まずはリリカ、イントロはｐｉａｎｏに・・・軽快さを持って》
リリカの音楽の特徴・・・高低差の広い、ハッキリした音。

テクニカルな演奏も難なくこなすその腕は、姉妹の中でおそらく一番。
《・・・コントラバス、抑えながら。5小節後、ルナサ入って。リリカ、スプリット『アコーディオン』》
実際に勢い付けを始めるこの旋律・・・ルナサの安定した音階取りで、全体の旋律を落ち着かせ、『音楽』を作っていく。
《6小節後、メルラン・・・思いっきり吹け》
聞いていると幸せになれそうな、その勢いや力強さを持つメルランの音楽。前面に押し出し、バックにはリリカで速弾をさせておく。
《・・・・・・ルナサ、2オクターブ上！　メルラン、半音上げて！　リリカ、スプリットを『リードシンセ』に！》
一番迫力をつけた、最後の16小節。ルナサは高音、メルランは強音、リリカは速弾・・・楽しむために作られた、最後の数秒間。これを終えれば、もう一度始めに戻る。
《トーンダウン！　リリカ、もう一度1小節目から！》
・・・・・・・・・・

ライブの反響は好調、立派にサポートメンバーとして俺は認められた・・・多分。
証拠（？）　として「見直した」「頑張った」などと言葉を貰った。
正直、めっちゃ叩かれるかと思った。予想外の展開だったが、まぁこれも大体はあいつらのお膳立てのおかげだろう。

「・・・・・・なぁ」
「ん？」
「どうしたの？」
「奏？」
「俺、何の仕事に就くか決めた」
「へっ？」
「今さっき、やっぱりこれしかないな・・・って思ってさ」
「まだ決めてなかったの・・・」
いつも着ている服のジャケットの内ポケットにしまわれてある、就職申請書。
俺はそれに服越しに触れ、
「奏・・・やっぱり」
「あぁ。お前と約束したし・・・サポートメンバーになるよ、俺」
俺には、音楽くらいしか出来る事もないし、したいこともない。それに、リリカにずっと一緒だって約束した。だから・・・俺はこの仕事を選ぶ。
「でも、冥界から出られるかな・・・？」
「俺は死んだわけじゃねぇし。冥界に縛られた魂もない・・・だから、多分大丈夫だと思うぞ・・・・・・じゃあ、俺は行く。じゃな」
「あ、奏！　その・・・明日、巳の二つ（午前十一時くらい）に出発だから！」
「ん？　あぁ、わかった」
そして、俺は僅かに桜の舞うライブ会場を飛び立った。

白玉楼に戻ってから、俺は書類を幽々子に渡した。
「・・・・・・ふぅむ、これなら住居は白玉楼じゃないほうがいいねぇ・・・」
「じゃあ、いいのか？」
「ふふ、まぁ、二つの条件をクリア出来ればだけど」
「条件？」
「まずは、これ。『冥界外活動特別許可証』・・・幽霊や騒霊、霊体が外へ出入り自由になる許可証。プリズムリバー三姉妹はこれを取ってるから外に出られるんだよね」
青い紙を取り出すと、ぴらぴらと振る。
「まぁこれは・・・その家族になればいいだけなんだけど」
それはつまり、結婚・・・リリカと？　まぁ、悪い気分はしねぇな。
「何気に凄いこと考えないの」
「ッ？！」
ば、ばれた！？
「だって奏君、ニヤってしてたもの。わかるよそりゃぁ」
「そうか・・・」
いかん、恥ずかしくなってまた顔が・・・。
「・・・・・・で、それはいいとして」
くすっ、と笑い、幽々子は続けた。
むしろそっちのほうが痛いんだが・・・。
「・・・もう一つの条件。『外界に生き残れるか』って言うテストがあるのよ。それがなきゃ、『人妖幻争』が勃発してるこのご時世、生き残れるかどうか・・・」
「消滅したら、責任は許可したお前にかかるから、消滅しない奴だけ外に出そうってか」
「そそ。テストの内容は・・・私と戦うの。普段は妖夢だけどね、一回戦っちゃってるし。一応やっとかなきゃ、他に示しがつかないっていうか」

妖夢・・・・・・そんな役目もあったのか・・・・。
「なるほど・・・」
プリズムリバー三姉妹が出て行くまでにやったほうがいいわよね？」
「そうだな」
「確か、書類では出立は巳の二つだったから・・・辰の刻（８時程度）くらいかしら。それくらいには始めましょ」
「・・・・・・あぁ、わかった」
もう時間も時間だから、と幽々子は俺に寝るように言って、妖夢の部屋へと向かった。何かするのか、と聞いたら殺気漲る笑顔で『何でもないわよ』と言われた。俺はそれ以上聞かずに、とりあえず寝ることにした。

「――――――――始めッ！」
妖夢の合図と共に、俺は指揮を始めた。幽々子や妖夢といる間に完成した、五つの曲のうちの一つ・・・・・名づけるとしたら、『東方妖々夢～Ａｎｃｉｅｎｔ　Ｔｅｍｐｌｅ』と言ったところか。
冥界の入り口、入ってすぐの長い階段の間に妖夢といる間だけ聞こえてくる音楽だった。
ボリュームは大きめ、フルートが目立つ曲だ。全体のテンポは遅いが、勢い自体は非常に強い。まさに、戦いに望む妖夢・その一・・・・と体現するにふさわしい曲だ。
「『西行寺無余涅槃』」

「『東方妖々夢～Ａｎｃｉｅｎｔ　Ｔｅｍｐｌｅ』」
四方に飛ぶレーザー・・・無視でいいか。よし、弾幕は薄いほうだ。
《ピアノ、少し抑えながら。ドラムは早いが力み過ぎないように・・・って、弾幕が縦伸びしてきた？！》
縦拡張して来た弾幕を、くるりくるりと身体の芯を微細に動かしながらかわしていく。
「こえぇぇ・・・」
伸びた弾幕に相反し、小さい動きでかわせる。
《ベース、もうちょっと抑えて》
「やっぱばれたか・・・『生者必滅の理　～魔境～』！」
左から迫る弾、右から来るレーザー・・・流石にこれは、さっきの動きじゃかわせない・・・よし、とりあえずサビの勢いに乗ってかわしてみよう。
「おお、頑張ってんじゃん」
《だー！　全体の音量をもっと大きくしやがれー！・・・全体のバランスとか気にしなくていいから！て言うか抑え過ぎてむしろバランスが悪くなってる！》
何とかかわせた。・・・準備完了、反撃開始だ・・・・・・！
「『妖々一閃』」
パシュッ、と言う何か封印のようなものが解ける音が鳴る。直後、十六方向から刃物とも見紛う霊力が幽々子に迫る。
「・・・？！」
《最後の一音、間違うなよ・・・！》
周りに蝶の弾幕を張るも貫通、幽々子は敢え無く無様に傷だらけに。
「・・・・・・あぅ」
「ふぅ・・・・・・勝ったよな、俺」
「いつつっ・・・・・・うん、奏くんの勝ちだね」
ぼろぼろになった着物の胸元を扇子で隠しつつ、幽々子は敗北宣言をした。
「幽々子様、コール。奏、おめでと」

妖夢は呟き、俺の腕を掴んで上に翳した。

「冥界特例婚姻届・・・まぁ、簡単に言えば外に出てる幽霊と冥界の幽霊が結婚するときに使われる書類かな。ほら、行ってらっしゃい。書類はちゃんと私に届くようになってるから」
どうやって・・・と聞こうと思ったが、妖夢に肩を叩かれ首を横に振られたからやめておいた。
「・・・・・・んじゃ、行く。色々ありがとな、幽々子、妖夢」
「いやいや、私はちょっと背中を押しただけだから」
それこそしてないと思うが・・・。
「仕事を全うしたまでよ」
つ、冷たくなった・・・・・・？　振ったのが響いてんのか・・・。

俺は二人に背を向け、強く地面を蹴って、幽冥結界へ飛び立った。

ａｒｅｎｅ：ｏｎｚｅ　幽霊楽団～Ｐｈａｎｔｏｍ　Ｅｎｓｅｍｂｌｅ．（後

遅くなってしまったお詫びに軽く説明します。

軽く伏線を引いていましたが、互いに一目ぼれです。
小町の事は好きというわけではないんです。
ルナサは若干キャラ崩壊していますが、リリカとメルランと主人公君といるときだけです。
リリカの狡猾さが出てないのは何ででしょう・・・。

この冥界が終わってから、小町のところのお話を書きたいと思いますがどうでしょう・・・？
地獄でなんかライブ的なことがあって、ついでに彼岸に奏君が行く、みたいなストーリーですが。。。

評価、お待ちしております（何

ａｒｅｎｅ：ｄｏｕｚｅ　東方妖々夢～Ａｎｃｉｅｎｔ　Ｔｅｍｐｌｅ．（前書

えぇと・・・長くてごめんなさい。
元々こんなに長くする予定ではなかったのですが、どうしても起承転結かきたかったので・・・。

前話で出してきた「東方妖々夢～Ａｎｃｉｅｎｔ　Ｔｅｍｐｌｅ」をタイトルに使ったのは、これが妖夢中心だからです。
まあ、詳しくは読んでいただけたら。

空から見下ろしていると、ルナサが誰かと握手をかわしていた。
あれ、確か見たことあるぞ。リリカにあげた指輪を買ってくれた『庄屋の娘』じゃないか？
「どうもありがとうございました、鏡華さん」
「いやいや、最後のお色直しはちょっと驚いたけど、十分楽しめたし。完成度高かったよ、奏くんの演奏」
「それは私も思いました。本当に、音楽の才能があるんですよね、彼」
そこに俺は降り立っていく。
「・・・よ、ルナサ」
「あ、奏くん」
「この庄屋の娘とお前、どんな関係が？」
その問いにルナサは「へっ？」と首を傾げた。
「いや、その・・・そいつ、俺にあの指輪を買ってくれた奴でさ。どんな接点があるか知りたかっただけだ」
「あぁ、そういう事。鏡華さん、庄屋の娘なんて嘘ついてたんですか」
鏡華と呼ばれた、庄屋の娘と嘘をついていたそいつはふふっ、なんて笑って、
「いやぁ、そうそう誰にでも私の身分を明かすわけにはいかなくてさぁ。奏君には悪いけど、こうなるとは思ってなくてね。身分を伏せさせてもらったんだよ」
じゃあ本当は何だよ、と聞く前にそいつは自分の立場を明かす。

「私は飛天雅（ひてんが）　鏡華（きょうか）、冥界～外界の運搬業をいってに引き受ける『飛天雅搬送』って言う飛脚・問屋会社の会長よ」
「で、ついでに私たちのスポンサー。オフィシャルアイテムなんかの販売も、この人の会社だよ」
・・・・・・・えと、状況が飲み込めません。
「・・・状況が飲み込めない、って顔してるねぇ」
「あぁ、飲み込めねぇ。もっと簡単に教えてくれ」
「この人は超偉いお金持ちで、私たちのスポンサーなの」
「えらいひとでーす」
鏡華は自分を指差して、ニコリと笑う。
こんな奴が会社の一番偉い奴だとはやや信じ難いな・・・。
でもまぁ、冥界では見た目の成長なんてないし、こんな俺と同じくらいに見える凄い奴がいてもおかしくはないか。
「・・・・・・・・・ところで奏くん、お仕事の件はどうなったのかな？」
「あぁ、それなんだが・・・リリカはいるか？」
「・・・そこのトレーラー。今まで、重い荷物とかあるときはトレーラーを使って移動してた。空飛ぶのよ」
空飛ぶトレーラー・・・なんかそれはそれで気持ち悪いな・・・と思いつつリリカのトレーラーの前に立った。
軽くノックし、
「リリカ」
と呼ぶ。
「奏。入って」
かちゃりと言う音が鳴り、鍵が開いたことを確認する。
「入るぞ」
扉を開き、俺はリリカのトレーラーへと足を踏み入れた。
「やあ、旦那様」
「よう、奥様」
軽く冗談を吐き、椅子へ座る。

リリカは落ち着いてこそいるものの、目には僅かな動揺がうかがえた。
やっぱり、焦り過ぎたのか・・・・・・？
いやいや、そんなことは無いはず。俺はリリカと、リリカは俺と、離れたくなかったから約束したんだ・・・。
俺は、用意していた紙を取り出す。
「リリカ。俺が冥界の外へ出るには、ある条件をクリアする必要がある」
「え・・・・・・？」
「『冥界の外へ出ることを許可された幽霊の親族になる事』・・・つまり、戸籍的に結婚するって事だ」
結婚。その言葉に、ピクリと反応するリリカ。
「その・・・して、くれるか？」
俺のその言葉に、リリカは右手を見せる。
もう約束してるじゃないの、と。
「もちろんよ。えと、ここに名前を書けばいいのね」
何処からか取り出したボールペンで、書類に手早くサイン。
「ぁ、おう。これでいいな」
紙を取ると、俺は呟く。そして立ち上がり、
「じゃあ、俺はこれ届けなきゃいけねぇし、行って来る」
「じゃあ私も行く」
「なんでまた？　別にいいだろ」
「だって、婚姻届って二人で出すもんでしょ」
あ。確かに、言われてみるとそうかも。でもそれは大分恥ずかしいんじゃ・・・。
「・・・・・・じゃ、行くか」
「うん」
と、扉を開けようとしたとき。
ガッ。
『あでっ』

『だ、大丈夫、メルラン？』
「・・・・・・」
「姉さん・・・」
扉の向こうから、音が。と言うか、声が。
盗み聞きしてる奴がいた・・・。
「お前ら・・・・・・聞いてたのか？」
「え、っと。まぁ、聞いてなかったと言えば嘘になるね」
「そりゃあ、結婚なんて面白い話題、聞かないわけにはいかないでしょ」
「で、戸籍以外でどんな仲なの、二人」
なんて鏡華が聞いてきたが、無視だ、無視。
「リリカ、行くぞ」
たんっ、と軽くジャンプ、その勢いで空へ飛び立つ。
「あ、待って！」
それにあわせて、ふわりと柔らかいステップでリリカは近づいてきた。
「あー・・・・・・ちぇ、まぁ、ここで待ってるから行ってらっしゃい！」
「おう！」
リリカと一緒に、俺は白玉楼へ向かう階段を飛び始めた。
あぁ・・・これからもこうなのか・・・・・・なんか、そういうのっていいよな。

「あらあら、新婚さんが仲良く婚姻届を持ってきてくれたわ」
「・・・・・・」
白玉楼でにこにこと待ち構えていた幽々子、そのすぐ傍で座ってい

る妖夢。
「うん、必要事項には全部書き込んでくれてるね。受理するわ。晴れてこれで貴方達も夫婦よ」
夫婦・・・うぁ、何か恥ずかしいな・・・。
「じゃ、奏くん。荷物を取りに行ってちょうだい」
そうそう、言い忘れてたが、俺は一応着替えや筆記用具なんてものも、小町や映姫、幽々子からもらっている。いや、流石に着替えないとまずいだろ・・・。
「あぁ、わかった。・・・リリカ、ちょっと待っててくれるか？」
「うん」
「・・・・・・では、私はお茶を淹れて参ります、幽々子様」
「よろしく～」
俺と妖夢は同時に立ち上がり、しばらくは同じ方向へ向かった。
途中で別れたが、終始妖夢は冷たい目をしていた。

「・・・・・・これで全部か・・・そんな多くもなかったな」
スーツケースに普通に入る程度の荷物。まだ余裕がある。
ケースを閉じ、立ち上がって、襖（ふすま）を開いた。
その瞬間・・・・・・
腰の部分に一瞬の締め付けを感じ、そして口の部分が布で覆われる。
息を飲んだのが悪かったのか、意識が遠のいていった。
そんな中で働いた思考は、「クロロホルム・・・・・・？」と言う、
まぁそれはそれは毒々しい催眠薬の名前だった。
そういえばクロロホルムって、改めて怖い名前だよな。

「っん・・・・・・ぅ」
頭が痛い。殴られたような鈍痛なんかじゃなくて、頭のどこかに棘が刺さってるような、ツンとした痛みだ。
それに、何か視線も感じる。
まて、さっき起こったことを思い出せ――――――――――――――
確か、俺は誰かに押さえられ、そして気絶させられた。
とまぁ、ここまで考えるのに二秒～三秒かかってないわけで。
ゆっくりと目を開けると、そこには妖夢の姿が。
「・・・・・・・奏」
「妖夢・・・？」
この瞬間に、誰がやったかは予想がついた。しかし・・・・・・わからないのは理由だ。
どうして、妖夢は俺を・・・さらった？（いや、この言い方もどうかと思うが）
「・・・・・・なんで、って顔してるわね」
「あぁ・・・」
相変わらず妖夢はいつもと違う・・・ってこれじゃ矛盾するな。
えと・・・・・・とにかく！　さっきからずっと、妖夢は冷たい目をしている。
しかし、今の体制も疑問だ。
「何で、俺の身体に四つ這い？」
「逃げないように」
うわ、怖ぇ・・・。
「・・・・・・・・・で？　ここは何処だ」
「内緒・・・って言いたいけど、いつかは幽々子様が来るし。ここは、幽々子様の部屋の地下。何をするところかなんて、聞かないで」
察してくれ、って事はつまり・・・・・・まぁ、そういう事をする部屋なのだろう。
「で？　どうして俺をこんな所へ？」
「・・・・・・ゃだから」

「？」
「リリカに、貴方をとられるのはいやだからっ！」
いや、予想はしてた。頭の隅で、そんな考えはあった。
だがな、現実に起こると、俺も多少はビビる訳だ。じゃあ他に何があるよ、と聞かれても俺には答えられない。
「妖夢」
「貴方は誰にも渡さない」
無視。
「妖夢」
「貴方を何処にも行かせない」
ガン無視。
「妖夢」
「絶対に・・・」
「妖夢！」
「！！」
やっと気づいたか。
「これ以上、お前を嫌いになりたくない・・・頼む、やめてくれ」
答えはもう、出ていたはずなんだ。妖夢は、それに納得がいかない・・・というか、まだ認められないらしい。
「わかってるだろ」
「・・・・・・」
「俺は、リリカが好きなんだ。お前じゃないんだよ、妖夢」
改めて、妖夢に言った。そうだろ？　俺は妖夢のそばで生きてはいられない。リリカじゃなきゃ・・・そうさ、リリカじゃなきゃ駄目なんだ。
「・・・それでも！」
いや、まて？！　妖夢、お前何やって・・・・・・？！
「奏！！」
「奏くん！」
ばんっ！　と扉が開き、リリカと幽々子が入ってきた。

「妖夢、やっぱり貴女・・・」
「く・・・・・・・！！」
妖夢は俺から飛びのき、壁にかかっていた長い剣を取る。
「・・・・・・『閃々散華』！」
びしゅっ、と桜色の波紋が通ったかと思うと、妖夢はそこにはいない。
「あらあら、逃げ足が『速かった』わねぇ」
ん？　速かった？
「妖夢、私の目は欺けないわよ？」
「・・・幽々子様・・・」
おや、妖夢は・・・幽々子の腕に絡めとられている。と言うより、幽々子の胸に抱かれている。
「わかってたわよね？　ちゃんと、言われたのよね？」
「・・・・・・はい・・・」
「なら、どうして？」
全部わかってるから、奏くんに説明しなさい・・・俺には、そう聞こえた。
「諦められません。私は、やっぱり・・・奏のこと、好きなんです」
「だからこんなことしたの？　違うでしょ。こんなことしても奏くんは振り向かないって、貴女も知ってるわよね」
「・・・・・・・・・・・・」
妖夢は、しょんぼりと俯いた。
幽々子はあくまで、優しく言う。妖夢に、認めさせるように。
「『忘れられたくなかった』・・・」
「！！」
幽々子の言葉に、妖夢は少し驚いた顔を見せた。
「こんなことまでして・・・そこまで、忘れられると思ったの？」
「・・・・・・はい」
妖夢が呟いたところで、幽々子が俺に視線を投げた。
・・・あぁ、何か言え、ってことか。

妖夢に近づき、俺は言う。「奏」と、リリカが心配そうに呟くが俺は「心配ない」と頭に手を置いてやった。
「馬鹿。お前のこと、確かに好きじゃねぇが、憎い訳でもねぇよ。初めてプレゼントした奴のこと、忘れるほうがおかしいっての」
リリカから手を離し、妖夢の頬に触れる。
「あ・・・」
そして、頭の髪飾りに手を移した。
「これ、つけてる間は・・・絶対に、忘れねぇよ」
忘れてなんかやらねぇ。そうさ、こいつがカチューシャをつけてる間でも、俺は覚えててやらなきゃいけねぇんだ。
「だから、忘れられたくないんなら・・・これ、肌身離さず持ってろよ」
「・・・うん・・・うん・・・！」
あれ、意外と素直になったな。ま、いいか。
「・・・・・・幽々子。じゃあ、俺は行くぜ」
「うん、わかった」
・・・・・・・・・そうして、俺達は白玉楼を・・・冥界を旅立った。

俺のトレーラーは用意されず、リリカと一緒のトレーラーに乗る事になった。
「・・・ねぇ、奏」
「ん」
「あの・・・妖夢の、ことなんだけど」
・・・・・・妖、夢？　どうしてまた・・・・・・？
「何で奏のこと、好きになったのか・・・知らない？」
「あぁ・・・・・・俺はな、あいつと一度闘ったときに言ったんだ。『張り詰めすぎている、もう少し肩の力を抜け』ってな。したら、

それを見抜いて、ちゃんと言ってくれたのは俺が初めてで、それから俺のことばっか考えるようになった・・・らしいぞ。でも、何でいきなり」
「うん・・・ちょっと気になっただけ。貴方は気にしないで」
いや、気になるだろ・・・普通。
「ところで・・・どうして、リリカ。お前は、俺を・・・」
「一目惚れ。貴方と、貴方の音楽に」
・・・・・・面と向かって言われると、恥ずかしいもんだな、意外と。
「俺も・・・多分・・・お前と、お前の音楽に一目惚れしたんだ」
「・・・・・・・・・・ぅ」
リリカの顔が紅く染まる。やっぱ、こういうのは言われると恥ずかしいよな。
俺はリリカの手を握り、言った。
「俺は、妖夢のこと、あれでよかったと思ってる。たとえ俺に、あの髪飾りに依存して生きるとしても、あいつはあいつでいられるんだ・・・一つの事に、真摯になれる奴でいられるんだ。それで、俺はいいと思う」
俺のことを忘れたくない・・・いつか、その想いも風化して、名刀とその鞘のように、余裕のある奴になるだろう。だから、それまでの支えになれば・・・それで、いいんじゃないか。
「奏・・・・・・優しいんだね」
「そうか？」
「うん。私が『本当に聞きたいこと』まで、ちゃんとわかってくれたし。それに、妖夢の事も考えてるし」
リリカは、俺の手を強く握り返した。
その顔は、優しく笑っていた。
俺もとりあえず、つられて笑っておいた。

arene:douze　東方妖々夢～Ancient Temple.（後書

これで、とりあえずこの小説は一区切り・・・冥界邂逅編終了・・・
と言ったところでしょうか。
後ちょっと彼岸でこまっちゃんでも書こうかなぁ・・・とも思いま
すが、どうでしょうか・・・？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0851f/

君と二人で〜Render with you.

2010年10月10日03時10分発行